
おくりもの

かつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おくりもの

【Nコード】

N2776V

【作者名】

かっぷ

【あらすじ】

作曲を趣味とする冴えない中年、昴。天賦の歌声を持つ女子高生、鈴音。二人は一緒に曲作りに励み、完成した曲をインターネットで公開するという日々を送る。それなりに楽しい毎日が続く中、彼らの曲に目を付け、自分の物にしようと考える者が現れた。

第一話：ギフト

駅まで徒歩で十五分、コンビニまで徒歩で二十分。一畳二間の、さして広くも無い薄汚れたアパート。その二階。

黒いペンで『富永』と書かれた表札の部屋から、微かなピアノの音が漏れ聞こえて来る。

「んー……こうか？　こんな感じ……か？」

鍵盤の上を滑る太い指。同時に電子制御され、小さく絞りこまれた旋律がスピーカーから流れ出る。

大きな身体を安っぽい椅子に預け、その図体に似合わぬ繊細な動きでキーボードを操る男性。彼の名は富永^{とみながすばる}昂、三十六歳、会社員。どこにでもいる、くたびれたサラリーマン。

「よし、今の感じで……もう一回やろう」

「はい！　お願いしますっ！」

昂の言葉に応える明るい声。彼が弾くキーボードを挟んで、向かい側に立つ少女の声だ。

年の頃は十代中頃といった所だろうか？　可愛らしい容姿をしているのだが、少々大きな目のシャツとジーンズ、肩口までの黒髪を軽くピンで止めただけという飾り気無い服装が、その眩い輝きに影を落としている。

「すうつ、はあ。すうつ、はああ……」

キーボードの音にあわせて深呼吸を繰り返す彼女の名は白地^{しらちすずね}鈴音、十七歳。人よりもちよつと可愛い容姿の、そして人よりもちよつと

歌うのが好きな女の子だ。

「あいいうえあお……ん、オツケです」

鈴音の声に黙って頷く昴。指先でカウントを刻みながら、逆の手で器用にキーボードを弾いてリズムを作り始める。やがて滑らかな音の波がスピーカーから流れ出し、それに乗るようにして鈴音が声を重ねた。

「…………、去年の今頃…………」

少女の小さな口から溢れるのは、深みのある、優しい声。歳若い娘特有の高い音域でありながら聴いた者の心に染み渡り、落ち着きを与える不思議な声。誰もが天性の才能という言葉を思い浮かべる、そんな歌声だ。

そして彼女が歌うのは誰も聞いた事の無い歌詞、誰も聞いたことの無いメロディー。鈴音の為に作られた、鈴音の為の歌だった。

「…………見てる、から……………」

と、その歌声が不意に途絶える。同時にピアノの旋律も小さくフェードアウトした。

マイクから顔を背け、そっと息を吐く鈴音。昴も同様に、ゆっくりと鼻から息を吹き出す。

「よし、このフレーズはこんなモンだろ。後は編集で繋げるよ。……お疲れ、鈴音ちゃん」

「はい、お疲れ様でしたっ!」

昴の言葉に鈴音の顔が綻ぶ。緊張の抜けたその表情はとても自然

で、歌っていた時の不思議な魅力はどこへやら。鈴音はごく普通の、どこにでもいる、ちょっと可愛いだけがとりえの娘となっていた。

「いつアップするんですか？」

「今夜中にざっくり編集して……仕事中に細かいトコ考えて……明日の夜になるかな？」

録音機材の片付けを手伝いながら問い掛けた鈴音は、昴の回答にフンフンと鼻を鳴らして目を輝かせた。自分の歌が、自分たちの曲がどのような形を成すのか楽しみで仕方ない……そんな様子がありありと窺える。

「あ、でもダメだ。曲名考えて無いや」

「えええええっ!？」

頭を掻きながらポツリと溢した昴に、明らかな不満の声をぶつける鈴音。先程まで見せていた明るい笑顔から一転、オモチャを取り上げられた幼児が見せる泣き顔に近い表情となる。

「もおっ! なにやってるんですかあ! そういうのって普通、最初に考えておくモノじゃないんですか!？」

「いやー、一応考えてただけどさ。ホラ、途中で歌詞を変えただけだろ? だからちよっと曲名もいじりたいな、と思って」

悪い悪い、と適当になだめる昴に、未だ不満気な様子の鈴音。

「そうむくれるなよ、鈴音ちゃん。ちゃんと明日までには考えておくから」

「……絶対ですよ? 期待してますからね?」

そんなやり取りを交わしながら、部屋を片付け始める二人。

彼らはいわゆるアマチュア音楽家だ。昴が作詞、作曲と編集を。

鈴音が歌を担当し、作った曲をインターネットの動画共有サイトに投稿する等の活動をしている。

だが、活動といっても二人はプロを目指しているわけではない。趣味としてオリジナルの曲作りをしている、どこにでも居る音楽好きの一般人だ。時には自分たちの曲が口コミで有名になって運良くメジャーデビュー！……などという妄想をしなくも無いが、それが叶わぬ夢である事は重々承知している。

特に三十半ばである昴は、そういった現実的な思考を主とする傾向が顕著だった。

今だって本当なら一晩中でも曲の編集をしていたのだが、明日の会社を思うと一銭にもならない趣味に割ける時間は少ない。生活の基盤である仕事を疎かにする事はできず……。

「ふう、現実には厳しいな」

叶わぬ夢を、遠まわしな愚痴で表現するのが関の山だ。

「ほらスバルさんっ！ たそがれてないでアンプ動かすの手伝って下さいよお！」

「ああ、悪い悪い。その辺りの重たいやつは僕がやっつくよ」

そして鈴音を前にして贅沢な自分の環境を思い返し、様々な言葉を飲み込むのだった。

第二話：私だけを見て！

息苦しい。

扉はぴっちりと閉め切られ、窓には分厚いカーテンが引かれている。光、空気、音……それら外界からの情報を殆どシャットアウトした薄暗い室内。そこに昴と鈴音は居た。

古いシーリングライトに見守られ、パソコンのディスプレイを食い入るように見つめる二人。

「どうですか？」

「ん……まあ、まだなんとも……」

二人が見ているのはインターネットの有名動画共有サイト『ニコニコ動画』だ。動画や楽曲を自由に投稿・閲覧でき、それらに対し気軽にコメントを付ける事が出来る為、若者を中心に絶大な人気を誇っている。

昴と鈴音も愛用者であり、先日完成したばかりの曲を早速投稿したのだった。

「再生数は伸びてるんだけど……コメントが付かないな」

椅子に腰掛けて画面を操作する昴。その後ろでは鈴音が不安そうな表情を見せる。

投稿されたばかりの動画や楽曲は、新着という特別扱いを受ける。その間は閲覧者の目に止まりやすくなり、自然と再生数も増える。事実、二人が投稿した曲も順調に再生数を伸ばしていたのだが……。

「……ダメだ。新着から漏れた途端に、再生数も止まった」

増えなくなった数字を前に、がっくりと肩を落す鈴音。そして昂も彼女に聞こえないよう、小さな溜息をついた。

いつもの事なのだ。

ごく一部の人気がある作品を除き、大半は二人が投稿した楽曲と同じ運命を辿る。

新着という事で注目されて最初こそ多くの人に再生されるものの、それ以降は他の作品に埋もれ、忘れられてしまう。プロの作った曲でさえ売れ残る現代。素人の作った曲を何度も聴く酔狂な人間は、そういないという事だろう。

何か話題性でもあれば良いのだけど……毎回、再生されなくなつた曲を前に昂は思う。

曲にはそれなりの自信がある。鈴音の歌だって申し分無い。後は見せ方だ。今のように映像無しの歌をただ流すのでは無く、プロモーションビデオのように動画と連動させたりすれば、きっと見てくれる人は増えるはずなのに。

「……あ、見て！ スバルさんっ！」

思考の海に潜っていた昂の意識を、鈴音の声が現実に戻した。慌てて画面を見てみれば、これまで白紙だったコメント欄に短い文字が入力されている。曲を聴いた人から、待望のコメントが寄せられたのだ。

期待に目を輝かせ「何て書いてありますか!？」とコメント欄に擦り寄る鈴音……だが、その表情が凍りつく。

『おっばい、うp希望』

ただ一言、それだけが書かれたコメント欄。コメントはたった、それだけだった。

「……死んじゃえッ!!」

鈴音の怒鳴り声が室内に響き渡る。続けて『ヘンタイ!』だの『スケベ!』『最ッ低!』だのといった言葉が次々に飛び出す。そんな鈴音に苦笑いの昴。

「そう怒るなって、いつもの事じゃないか。興味の無い奴は、わざわざコメントなんかしない。って事は、少なからず僕たちの曲に興味持ってくれたんだよ」

昴はいつもの台詞で鈴音をなだめ、自分自身の淡い期待も消去するように努めた。

『最高』『神曲』『フェイバリットソング』……そんなポジティブな言葉で溢れかえるコメント欄。そんなの、自分たちには有り得ない事だとわかってている。だが考えずにはいられない。もっと聴いてくれる人が増えれば、あるいは……と。

おっぱい……は流石に無いとしても、歌い手である鈴音の姿を見せる事ができれば、そうすれば間違いなく再生数を増やす事ができる。そうすれば……。

ちらり、横目で鈴音を窺う昴。

まだ怒りが収まらない様子の彼女は、顔をほんのりと紅潮させて眉を吊り上げている。そんな状態であっても、彼女は可愛らしい。鼻屑目もあるだろうが、客観的に見ても決して他人に劣るような事は無いだろう。

——もし鈴音が露出多めのコスプレして歌い踊ったりなんかしたら、再生数ウナギ登りだろうな——

そんな思考が一瞬だけ昴の頭を過ぎった、その時だ。

「……スバルさん」

怒りに熱く燃えていた鈴音の声が、いつの間にやら氷点下を感じさせる冷たいものに変化していた。そして凍てつくような冷たい視線。

「今、なにかイヤらしい事を考えませんでした？」
「う……！」

何故わかる！？
焦り、慌てて首を左右に振る昴。

「ふうん……そうですか？ それなら良いんですけど……例えば、私にちよつとエッチなコスプレさせて歌って躍らせれば再生数伸びるだろうな……とか考えてませんでした？」
「ううっ！？」

どうしてそこまで具体的に思考がバレる！？ もしこれが女のカンというヤツだとするならば、女は全員エスパーか何かではないか。怖すぎる！

「いや滅相も無い！ そんな事……」

戦慄に震えながら昴が言いかけた時だ。鈴音が声のトーンを落とし、ボソボソと呟いた。

「まあ、スバルさんがどうしてもっ！……って言うのなら私、そういうの頑張ってみても……」

最後の方はボリュームが小さくなりすぎて何を言っているのか聞

こえなかった。聞き取ろうと俯いた顔を覗きこんでみれば、拗ねたように口を尖らせ、ふっくらとした頬を真っ赤に染めている鈴音の顔。

昴はこの時、ようやく理解した。

基本的に裏方の昴と違い、表舞台の最前線で歌を届ける立場の鈴音にとって「コスプレしてでも注目されたい」発言は、すぐさま自分へと跳ね返ってくる、口にするだけでも相当の覚悟が必要な台詞だったのだろう。

だが少々恥かしい真似をしてでも多くの人に歌を聴いて欲しい。そう心より願っての言葉だったのだ。

そんないじらしい少女の姿を間近に見て、昴は不意に自身の不甲斐無さを痛感する。

「いや……鈴音ちゃんがそんな事をする必要無いよ」

昴はそう言って小柄な少女の頭にそっと手を乗せ、軽くポンポンと叩いた。

悪いのは、僕だ。

物作りに携わっている以上、注目を集めたいと願うのは至極当然の欲望だろう。だがその欲望の抗い難さ故に当初の目的を忘れ、道を逸れてしまう。何をしてでも目立ちたい、と。

「僕たちは、これまで通りでやろう。ユーザーの反応は薄いかもしれないけど、コスプレで人気になっても仕方ないもんな。ちゃんと歌を評価してもらわないと」

俺がブレてどうする。しっかりしろ、大人だろ？ 伊達に中年やってるワケじゃないんだろ！？

自身の心を叱咤し、二人が進むべき道と目指す場所を改めて確認する昴。安易な方向に流されない強さを。大人の男としての責任感

を。迷いがちな若者を導ける経験を身に付ける為に。

「……わかりました、スバルさん」

大きな手の下で微笑む鈴音。その表情に、先程までの戸惑いは無い。

「私、頑張って歌いますね！」

「ああ、僕も……一緒に頑張ろう」

照れ臭そうに見つめあい笑顔を交わす二人の側で、新たに書き込まれたコメントがひっそりとディスプレイに表示される。

『オレこの曲好きだ。もっと評価されるべき』

第三話：土曜日の恋人

平日の午前中。

社会人の多くは汗水垂らして必死に働き、学生の多くは机に齧りついて勉強に励んでいるであろう時間帯。

社会人であるはずの富永昂はエアコンの効いた喫茶店の一席で、優雅にアイスコーヒーなど口にしながら柔らかなソファに身体を預けていた。

「羨ましいだろう？」

ニヤリ、と頬の端を歪めながら言い放つ昂。彼は別に、真面目に頑張る社会人や学生にケンカを売っているわけではない。彼の正面に座る、スーツ姿の男性に対して言ったのだ。

「いや、別に」

スーツの男性は事も無くそう言って、タバコを一服。そして何気ない仕草でそれを揉み消し、細く長く息を吐いた。どこか優雅で洗練された動き。高そうなスーツと、さり気無い高級ブランドの革靴が嫌味でなく良く似合う。

手足はスラリと長く、身長も高い。細面の整った顔はテレビで見る俳優を思わせる。その男性の事をざっくりと言ってしまえば、相当なイケメンという事になるだろう。

「お前さあ、ちょっとは羨ましがれよ。仕事の合間に打ち合わせと称してサボり放題の、この僕を！」

面白く無さそうに言って、昂がコーヒーを啜る。彼も決して出来

の悪い顔では無いのだが、スーツの男性と並び立つと荒が目立つ。ざっくりと言ってしまえば……数段劣る。

「ははっ、そんなだから出世できねえんだよスバルはさア。昔っからだ」

笑顔を見せるスーツの男性。彼の名は白地健太郎しらちけんたろう、三十五歳。昂とは学生時代からの付き合いだ。

「ケンタの癖にうるさい。一般のサラリーマンは、お前と違ってサボるのも仕事の内なんだ。これは休憩時間なの！」

「はは……それ服務規律違反じゃねえの？ まあクビになったら俺の事務所で雇ってやっから、心配すんな」

健太郎の高級スーツ、その襟で光る小さなバッジ——ヒマワリを中心に天秤が描かれたそれこそが彼の職業、弁護士¹の証。幅広い案件を扱い、小さいながらも自分の事務所を構えている。

「ま、俺にとっちゃスバルの仕事なんかどうでも良いんだ。そんな事より……」

何気に酷い事を言われて不満気な昂の前に、一枚の紙を置く健太郎。安っぽいコピー用紙に印刷されているそれは、何かの告知ポスターであるようだった。

「なんだよこれ……『ニロつと歌フェス』？ ウェブの……音楽イベントか？」

ポスターに目を通し、怪訝そうに友人の顔を見返す昂。新たなタバコに火をつけた健太郎は、意味ありげな笑みを見せて小声で話し

始める。

「ソレな、三ヵ月後に予定されてるイベントなんだとき。ネットで歌とか募集してコンテストしようぜ！　って話らしい」

さらに声を小さく絞る健太郎。心持ち、顔を寄せて先を続ける。

「んで、優秀作を集めてアルバムCDを発売する、って流れ」

「へえ……CDになるのか」

CD、との言葉に昴がぴくりと反応する。

アマチュア作家にとって自分の曲がCDとなって一般の流通ルートに乗る事は、目標の一つであると言える。自費製作では無い所がポイントだ。

「そこまで言ったらもうわかるだろ？　スバル、お前コレに応募しろよ。今から曲作ってさあ」

募集締め切りは三ヶ月後。今から本腰を入れて曲作りを始めれば、完全新作であっても間に合うだろう。

「……ちよつと気合入れて、やってみようかな」

昴の台詞に、嬉しそうな顔を見せる健太郎。

「おう、やってみろやってみろ。あ、でもこの話はオフレコで頼むな。まだ一般には告知されてねえから」

え？　と呟いて健太郎へと視線を送ると、ポスターを良く見てみる、と顎の先で示される。

確かに、ポスターの端には鉛筆による走り書きで一ヶ月先の日付が告知開始日として記されている。それによくよく見れば、このポスター自体が未完成であるようだ。

「ソレ、クライアントから校正刷りを貰ったんだわ。だから未発表……誰から貰った、とか聞くなよ？ 言えねえから」

ポケットから小銭を出してテーブルに置き、釣りはいらないと断りを入れて立ち上がる健太郎。そんな彼へ、昴は思わず声を掛けた。

「良いのかよケンタ、お前一応弁護士だろ？ マズいんじゃないのか？」

「凄えヤツなんざあわんさか居るんだ、構う事あるか。お前みてえな出来の悪いヤツにゃハンディも必要だろ？ どうせ一次選考にも残らねえとは思うけど、やる気あんなら頑張ってみろよ」

言いたい事を言い終えたのか、健太郎は「んじゃ、またな」と言い残して席を後にした。

そんな友人の背中と、手元のポスターを交互に見やる昴。

既に次曲の構想はある。制作に費やす時間は、健太郎のお陰で三ヶ月を確保できた。大多数の者よりも多い期間だ。これだけの時間があれば満足の行く新曲が作れるだろう。

想像が膨らむ。

他作品を蹴散らして優秀作品に選ばれる自分の曲。そして自分の曲が収録されたアルバムがショップに並ぶのだ。そこには作詞・作曲…富永昴。歌…鈴音と書かれていて……。

「うあ、何想像してんだよ」

頭を振って、都合の良い妄想を振り払う昴。三十六にもなって、

どれだけ想像逞しいんだ自分は！　こういうのが許されるのは精々十代までで……いや、ギリギリ三十歳でもいけるだろうか？

「ま、それはともかく」

残っていたコーヒーを飲み干し、勢い良く立ち上がる昴。今日は早めに仕事を終わらせて……作曲だ！

友人の置いていった小銭を集めて支払いを……と考える、ふと思う。

「ケンタ……足りないんだけど」

第四話：がんばれ、おねいさん

真っ黒な空に、ボンヤリと星が瞬く静かな夜。街灯も疎らな路地を独り歩く若い娘の姿があった。

片手には食料の入ったビニール袋を下げ、鼻歌混じりでトコトコ道を行くその少女は、やがて古びたアパートの前で足を止める。ちらりと見上げた部屋の窓には未だ明りが灯り、部屋の主がまだ起きている事を示していた。どうやら食料が無駄になる事は無さそうだ。点滅する蛍光灯の下を潜り、アパートの二階へ。富永と書かれた表札の前までやってくると、少女はおもむろにドアノブを捻る……あっさりと開いた。

「スバルさあん？ 鍵掛けとかなないとダメじゃないですかあ……まったく、もうっ」

玄関にて挨拶代わりの声を張り上げ、その少女……白地鈴音は、昂の部屋へと踏み入った。

何度も訪れた小さな部屋。用意されている自分用のスリッパに履き替えて短い廊下を進む。読み散らかした雑誌が多少散乱してはいたが、男の独り暮らしの割にはキレイに片付いているといえるだろう。漂う独特のニオイが、この部屋に來た事を再確認させてくれる。

「……また夕食、カップ麺だったのかな」

玄関から繋がる台所。洗い場に置かれたカップ麺のゴミを横目に、鈴音は扉で仕切られた奥の部屋を目指す。いつも昂とレコーディングを行っている部屋、通称音楽室だ。

この部屋に出入りするときは、なるべく音を立てないように。そのルールに従って、吸音材の貼られたお手製防音扉のノブにそっと

手を添える鈴音。ゆっくり回すと……固い感触。鍵が掛かっているのだ。

「玄関は開けっ放しなのね」

苦笑して、ポーチから取り出した合鍵でドアを開く……と、音の波が鈴音の肌を叩き、一瞬で部屋いっぱいに充満した。聞き覚えのあるフレーズ、そして声。昨日の夜に録音した、自分たちの歌だ。何度も聞き飽きる程に聴いた曲であるはずなのだが、耳にするたび気持ち盛り上がりテンションが上がる。鈴音は小躍りしたくなる衝動を堪え、そっと音楽室へと踏み込んだ。

「スバルさん」

「ん？ あれっ」

音楽に満たされた室内。鈴音がやってきた事に気付き、壁際でパソコンと向き合っていた昴が椅子ごと振り返った。その姿に、本日二度目の苦笑を浮かべる鈴音。

眠そうな両眼の下に隈を作り、髪はぐしゃぐしゃ無精ヒゲ付きという酷い有様の中年男性。およそ若い娘に見せるような姿では無い。せめてもの救いは、スエットの上下だけはしっかりと身に付けていた事だろうか。下着だったりしたら、目も当てられない。

「どうしたの鈴音ちゃん、こんな遅くに。オヤジが心配するぞ？」

流れる音楽のボリュームを下げながら昴が言う。咎めるというよりも、一応確認しているといった口調だ。

「お父さんには言っております。それより……」

昂の肩越しにパソコンの画面を覗き込む鈴音。そこには小さな五線譜と様々な棒グラフが表示されており、鈴音には理解不能な記号や各種ボタン、ツマミが並んでいる。

そして画面端にズラリと並ぶデータファイル。全てに中身が音楽である事を示す拡張子が付随されている。日付順に整理されたそれらファイルの一番上……そこに書かれていたファイル名は『新譜（仮）』だ。

「どの辺りまで進みました？」

「九分九厘、って所かな。もう少し曲の精度を上げておきたくて……まだ締め切りまで時間あるし」

カレンダーに目をやる二人。

『二ロつと歌フェス締め切り』と書かれた日付までは一週間。より正確には六日と半日の時間がある。

ふむ、と呟いた鈴音はカレンダーから目を離し、ここ数日ですっかり小汚い中年男性へと変貌した昂へ視線を移す。

なんだか一ヶ月前に比べ、痩せたように見える。やつれたと言うべきだろうか？　だが、それも無理の無い話。日中は会社、夜は音楽。仕事の繁忙期と重なっていた事もあって、ここ最近昂の生活は相当ハードな物になっていた。

以前は頻繁に自炊している姿も見られたのだが、最近は台所の使用率が低下しているようだ。それに反比例して増えたのが、カップ麺等を食べた形跡。三十を越えると太りやすくなるからジャンクフードや油物は避けると言っていたはずなのに。

「はあ……」

「ん？　鈴音ちゃん？」

これ見よがしに溜息を付いた鈴音。そんな彼女を昂はキョトンと

した表情で見つめ、椅子を揺らしている。その姿はまるで子供のようだ。多分、自分がやつれている事になんて気付いてもいないのだろう。

鈴音は思った。この人はダメだ、と。このままにしておいたら曲の完成を待たず、身体を壊して倒れてしまう。自分が心を鬼にして、昴の体調管理をしなければ！

「ところでスバルさん……ちゃんとお風呂入ってます？」

言って、昴を見る鈴音。椅子に腰掛ける彼を自然と見下ろす形になる。

「えっ！？ い、いや今日は……まだ……」

突然の問い掛けに言い淀む昴へ「やっぱり……」との台詞で追い討ちを掛ける鈴音。

「ご、ゴメン。もしかして……クサかった？」

思いの他慌てた様子で、自分のニオイを気にし始める昴。その姿は怯えているようにも見える。

「スバルさん、ゴハンはどうなんです？ まだなんじゃないですか？」

「さ、さっきラーメンを……」

大きな図体を縮込め、黙って頷く昴。叱られている子供のようだ。

「そんなんじゃないですよ！ 体調崩して音楽どころじゃ無くなっちゃいます。ゴハン用意しますから、お風呂に入って来て下さい！」

「えっ……いや、でも……もうちょつと曲をイジってから……」
「いますぐ、です！」

風呂場を指差し、キッパリと言い放つ十七歳。そして弾かれたように立ち上がり、駆け足で脱衣所へと向う三十六歳。

風呂場のドアが閉まり、シャワーの音が聞こえ始めて……鈴音は指差していた手を下ろした。

「なんだかスバルさん、怯えてたような？　それほど強く言ったつもりは無いんだけど……？」

顔が怖かったのだろうか？　パソコン画面に反射する自分の表情を様々な角度から検証し、首を傾げる鈴音。優しく諭すつもりだったのだが……男性の扱いというのは、ことのほか難しい。

「まあ、いいか。結果オーライ」

眩き、台所に立つ鈴音。

持参したビニール袋から食材を取り出して並べ、携帯で目当てのウェブページを呼び出す。

「えっと、炒めニンニク親子丼のレシピは……」

風呂場で髭を剃る昴の元へ香ばしい香りが漂ってくるのは、もう少し後の話となる。

第五話…ふたりの旅路

見上げれば、頂点が霞んでしまう程の高層ビル。低層階には各種テナントが入り、高層階は高級マンションとして売りに出されている。もちろん入り口には厳重なセキュリティが掛けられており、不審者は元より関係者以外の出入りが厳しく制限されている。

「ただいま」

そんなマンションの一室。指紋認証式セキュリティ扉を開けて我が家へと戻ったのは、可愛いワンピースで着飾った鈴音だ。

「いよう、おかえり鈴音！」

リビングにて、ソファで寝転んでいた健太郎がビール片手に振り返る。ガラステーブルの上にはビールの空き缶が三つ。良い調子で飲んでいるようだ。

「あれ？ お父さん、そんなに飲んじゃって……今日はもう仕事無いの？」

真新しいパンプスを脱ぎながら問う鈴音に、父である健太郎は空いた手をヒラヒラさせて応答する。問題ない、と言いたいようだ。

「ところでスバルの奴は？ 一緒だったんだろ？」

「ん……今日はもう帰るって。家の前まで送ってくれたんだけどね」

「ンだよ、愛想の無え奴だなあ。たまには寄って行けよお」

鈴音が部屋着に着替えてリビングに姿を現すと、健太郎は五本目

の缶ビールを開けた所だった。

「まだ飲むの、お父さん？ あんまり強くないんだから、程ほどに
してよね」

「オレの事は良いんだよ！ そんな事よりどうだった、歌フェスは
？」

父からの問い掛けに、一瞬表情を強張らせる鈴音。だがそれも一
秒にも満たない刹那の事。彼女はすぐに「凄かったよ」と答え、考
えを巡らせるように目を伏せて、ゆっくりと言葉を続けた。

「色々凄かったんだけど……まずは人の多さかなあ？ 何人くらい
居たのかわからないけど、開場の二時間前なのに凄く長い行列が出
来てたんだよ」

つい先程まで、鈴音は昴と連れ立って『ニロつと歌フェス・ザ・
ベスト』なるイベントに参加していた。

二ヶ月前、大盛況の内に幕を下ろしたウェブイベント『ニロつと
歌フェス』。

千曲近い応募の中から、人気の高かった上位二十曲が選出されC
Dアルバムに収録されるのだが、今日二人が足を運んだ『ザ・ベス
ト』は、それを記念してのイベントだった。

「ステージに何枚もスクリーンがあってね、動画と一緒に曲が流れ
るの。で、歌い手の人たちが実際にステージの上で歌うんだよ、本
物のアイドルみたいに」

喋りながら、会場で配っていたであろう案内チラシをテーブルの
上に広げる鈴音。案内図やイベント提供元の広告に混じり、ステー
ジの進行案内もあった。

娘の言葉に耳を傾けたまま、黙って進行案内表を取り上げる健太郎。そこにはステージで披露される楽曲、全二十曲が順番に並んでいた。

「やっぱり、画面越しに聞くのとは迫力が違うね。私、なんだかブルブルしちゃったよ」

身振りや手振りを交え、会場の様子や流れた歌について語る鈴音。健太郎は頷き、相槌を打ちながら話が途切れるのを待って、娘が覚えて避けて通った話題に踏み込む。

「で……スバルは何て？」

沈黙。

長い、沈黙だ。

「えっとね……レベルが違う、って」

少し沈んだトーン。抑揚の無い声で鈴音は父にそう伝えた。イベント会場の最前列。ステージライトの熱気を感じながら、そう言って肩を落す昂の姿が思い出される。

「音の質とか基本的な技術以前の着想やセンスが自分より数段上だ……とか、そんな感じの事をスバルさんは言ってた。私には良くわからなかったけど……」

「……そっか」

鈴音が声を枯らし、昂が目を腫らせて作り上げた渾身の一曲は、玉石混交の中にあって一度の脚光も浴びる事無く、その他大勢の中に紛れて消えた。

曲に対する感想も、批判すらも皆無。歯牙にも掛けられなかったといった所だろう。多く集まった曲の一つといった意味で、枯れ木も山の賑わいという言葉だけが唯一の救いだった。

「ねえ、お父さん。今日のイベント……行かない方が良かったのかな？ スバルさん、ちょっと落ち込んでたみたいだし」
「んな事あ無え」

自分たちをランキング表から弾き出した曲がどんな物か実際に聞いてみる。そして「そんなものか」と鼻で笑ってやれ——。そう言って、二人に今日のイベント行きを進めたのは健太郎だ。昂は最初あまり乗り気では無かったようだが、父と娘にステレオで説得されてしぶしぶ了承したのだ。

鈴音にしてみれば、曲が落選して落ち込んでいるであろう昂に、賑やかな場所がせめてもの気晴らしになるのでは？ との気持ちが強かったのだが、逆効果となってしまった事を否めない。

「でも、まあ仕方無えよ。スバルのヤツ……才能無えし」
「ちよっ！ お父さん！？」

温くなったビールを煽り、ソファでゴロリと寝返りを打つ健太郎。娘から浴びせられた不満の声を軽く受け流し、軽い調子で続ける。

「アイツ、自分でも言っただけでなかったか？ 才能無いって。鈴音、お前だってそう思うだろ？」

「そんな事……私はスバルさんの曲、好きだもん！」

ムキになって言い返す鈴音。しかし健太郎は至って冷静だ。

「お前が好きなのは勝手だけどな。何を言ったところで、結果が証明してらあな」

「……言いすぎだよ、お父さん。あんまりそんな事ばかり言っていると、わたし……怒るんだからね!？」

顔を真っ赤にして怒りを露わにし、勢い良く立ち上がる鈴音。そして「お父さんのバカ!」との捨て台詞を残し、小さなクッションを投げ付けて自分の部屋へ。

ボタン! と力任せに閉められたドアが、彼女の怒りを良く表現していた。

「怒るんだからってオマエ、もう既に怒ってんじゃねえか」

残ったビールを飲み干す健太郎。

「おいおい、スバルよう……お前のせいでオレ、どんどん娘に嫌われちゃってんじゃない」

ソファアーへ顔を伏せ、投げ付けられたクッションを腕の下に敷いて目を閉じた。

「そろそろ、かっこいいトコ見せてくれよな……」

第六話：明日があるさ

オレンジ色の夕焼けがビルの間へ、挟まるようにして沈み行くオフィス街。

とあるビルの、とあるフロア。たくさん事務机が並び、企業戦士たちが鎬を削る最前線。あるサラリーマンの通勤カバンの中で、携帯電話のベルが必死になって自分の主を呼んでいる。

だが肝心の主は上司との打ち合わせに忙しい様子で、携帯の悲痛な叫びには全く気付く事なく声を荒げていた。

「冗談でしょう？　ウチが全面協力してる企画ですよ！？　それが無くなった、ってどういう……」

半ば怒鳴るような口調で上司に食って掛かっていた携帯の主こと富永昂は、フロア中の注目が自分に集中している事に気付き、バツが悪そうに言葉を途中で途切れさせた。

「ごめんなさいね。ずっと頑張ってくれてた富永君には悪いのだけど……」

その間隙を狙い澄まし、知的なイメージ漂う眼鏡の女性が口を開いた。昂の上司にあたる女性だ。

「知ってるでしょう、しまやましようすけ島山昭助……そう、芸能人の。あの人がチャリティー企画をやりたいから、ウチの枠をくれって強引に押し込んできたの」

いわゆる大物芸能人と呼ばれる人物の名前が出た事に、多少の動揺を見せる昂。

昭助といえば、テレビで見ない日は無いと言われる程の売れっ子芸能人。芸暦も長く、その影響力は計り知れない。

その彼からの要望で、ここ数ヶ月に渡って昴が携わり、九分九厘まで決定していた企画が潰れてしまった。上司がしたのは、そういう報告だった。

「……もう、決まった事なんですね？」

「そうね、残念だけど」

表情一つ変えずにそう言った女上司に頭を一つ下げ、昴は踵を返す。そして真っ直ぐデスクに戻ると、カバンを手にして退社のタイムカードを押した。定時は、とっくに過ぎている。

「お疲れ様でした、先……失礼します」

淡々と言ってフロアを抜け、エレベーターに乗って階下へと降りる。ガラス張りのエントランス出口で社員証をかざしてビルを抜け出すと、そこには自分と同じように疲れた顔をして、安らぎの我が家を目指し歩を進める社畜たちで溢れていた。

そう、自分だけでは無い。みんな疲れているんだ。

「はぁ……」

溜息を一つ。

わかっている。みんな苦勞しているのはわかっているのだ。しかし、振り払った筈の「どうして自分だけ？」という思いが後から後から湧き上がって来る。

以前からずっと構想を温め、三ヶ月以上の時間を掛けて完成させた渾身の一曲は箸にも棒にも掛かる事無く歌フェス落選。そして今日、自分が中心となって半年以上も関わってきたプロジェクトは、

鶴の一声で抹消。

睡眠時間を削り、友達との飲み会を断って、自分は一体何の為に頑張ったんだろう？ 残ったのは、無力感だけだ。

「はああ……」

再度の溜息。

だが昴はすぐに顔を上げた。

帰りにスーパーへ寄ろう。そこで安ビールとおつまみの一つでも手に入れて、今夜は少し飲もう。そうだ、それが良い。ついでに何かDVDでも借りてノンビリと見れば良い。

そうしてまた、明日から精一杯……？

「あ、ああっ！ スバルさん……スバルさぁん！！」

夜の予定を考えていた昴の耳に、聞き覚えのある明るい声が割り込んできた。

「こっち、こっちですっ！」

声のする方向へと目を向けると、人の波を掻き分けながらこちらへと駆け寄ってくる女の子の姿が見えた。あれは誰かと考えるまでもなく、思い当たるのは一人しか居ない。

「へ？ あれ……鈴音ちゃん！？」

昴の声に輝くような明るい表情を見せる鈴音。見つけてもらえたのが相当嬉しかったようで、彼女は手をブンブンと大きく振って、一息に昴の元へとやって来る。

「どうしてこんな所に！？ 学校、確か逆方向だよね？」

「ちょ……はあはあはあ……ちよつと、待って下さいね……」

質問への答えを保留させ、小さな肩を上下させて息を整える鈴音。学校帰りであるらしく、手には黒の学生カバンを持ち、こなれたブレザーを着ている。基本的に普段着の鈴音しか見た事の無い昴の目には、その制服姿が新鮮に映っていた。

そんな昴の視線に気付く事なく、息を整えた鈴音は心底安心したような表情で、少しはにかみながら口を開く。

「近くまで来る用事があったので……スバルさんの会社、前に場所を聞いてたから、ちよつと行ってみようと思ったら……ま、迷っちゃって」

「あゝ、確かにこの辺りって似たような場所多いからなあ」

同じような形、同じような大きさのビルが立ち並ぶオフィス街。土地勘が無ければ迷うのも無理は無い。

「スバルさん、携帯に連絡したのに出てくれないんですもん」

「えっ？ ああ……ゴメン。ちよつと打ち合わせして……で、僕に何か用事でもあった？」

目線を合わせるように少し腰を傾げ、何気なく聞いた昴。特に意識して言ったわけでは無かったのだが、その質問は多いに鈴音を困らせた。

「え？ いえ、えつと……その……な、なんとなく？ みたいな……」

硬直し、目を泳がせる鈴音。

「……そっか、じゃあ鈴音ちゃん、この後って何か予定あったりする？」

「？ いえ、別に……」

「お、丁度良かった。僕、帰りにDVD借りようと思ってたんだけど、最近の映画って全然わかんなくてさ。どうしようかと思ってたんだ。一緒に来てオススメ教えてくれると助かるんだけど……」

何か、この場では話し難い話題があるのかもしれない。鈴音の様子からそれを察し、場所を変える事にした昴。三十六という年齢は伊達じゃないつものの彼だ。

案の定、あっさりと話に乗ってきた鈴音。嬉しそうに頷いて応える。

快諾を得た昴は、上機嫌の少女を伴って他のサラリーマンたちが歩くのと同じ方向へ歩き出す……と、スーツの袖がぐいっと引っ張られた。

「ん？ 鈴音ちゃん、どうしたの？」

「や、その……はぐれて、迷ったら嫌だから……」

ボソボソと小声で恥かしそうに囁く鈴音に、自分の姿を重ねる昴。そう、心細い物なのだ。抛り所が無くなるというのは、他人が思うよりも、ずっと……。

「そっか、じゃあこうしよう」

スーツの袖から鈴音の小さな手を取り、ぎゅっと握って手を繋ぐ昴。

「鈴音ちゃんが嫌でなければ、だけど」

「い、いえっ！　だいじょうぶ……デス」

少し恥かしそうに、だがとても嬉しそうな顔で、鈴音は目を伏せた。昂はそんな彼女の手を引いて、家路を急ぐのだった。

第七話：恋はみずいろ

鉄製の黒いフライパンが振られる度、白かった米が赤茶色に染ま
って行く。

「うん、そう。鈴音ちゃん、ウチにいるから……いや、自分からは
電話したくないって言うからさ……お前、ケンカでもしたんだろ？」

携帯電話を肩と耳の間で挟み、右手でフライパンを操りながら左
手で調味料を加える昴。分量を細かく量るような事はせず、塩コシ
ヨウは適当に数回振り掛け、ケチャップは思い切り握って雑に回し
掛ける。

「夕飯、適当に食わせたら送って行くから……ああ、心配すんな。
じゃ、またな」

慣れた動作で携帯を切って、フライパンを火から上げる。そして
用意してあった大皿に移し、彩り程度にパセリを振りかけた。先日、
鈴音が料理を手作りした時に余っていた物だ。

これで完成。

「はい、お待たせ。海鮮チャーハン」

そう言いながら昴が音楽室の扉を開けると、用意された小さなテ
ーブルの前で、腹を空かせた仔犬のようになった鈴音が満面の笑顔
で彼を出迎えた。

——ここは昴の部屋、いつもレコーディングをしている通称、音
楽室。そこを少し片付けて、小さな折り畳みテーブルを置いての夕
食。

幾度と無くこの部屋で顔を合わせていた二人だったが、ここで一緒にゴハンを食べたのは今日が初めて。互いに仕事や学校を終え、食事を済ませてから会うのが恒例となっていたからだ。

「お？……お、おいしい……!!」

「そう？ そりゃ良かった」

あまりの美味しさに全身を震わせ、感動と共に口から漏れ出した鈴音の心からの感想を、事も無くサラリと受け流す昴。その態度は暗に、この程度であればいつでも作れるよ……という彼の自信を物語っている。

部屋に戻って昴がスーツを脱いでから二十分程度。そんな短時間で調理したとは思えない完成度と味の良さだ。

海鮮チャーハンと昴は言ったが、どちらかというとパエリアに近い。一口大のイカや貝、そしてエビがふんだんに入った、ケチャップ炒めゴハン。これをチャーハンと言ったのは、お米がパサッと仕上がっていたからなのだろう。

「おいしい……スバルさん、これ美味しいですよ!」

鈴音はもう一度言った。大事な事だから、二度言った。

「んー、でもこれ鈴音ちゃん、イマイチだと思わない？ ケチャップの味が強くなりすぎた気がする」

「え……!？」

謙遜だとしても、こんな美味しい物をイマイチだと言ってしまうなんて……! 驚愕に目を見開く鈴音。この男はどれだけ味に厳しいというのか! この海鮮チャーハンに比べたら、前に自分が作った炒めニンニク親子丼など生ゴミ同然。よくもまあ昴は平気な顔で

食べたものだ。

過去の、調子に乗っていた自分が思い出されて恥かしいやら情けないやら……陰鬱な気分となってしまう。

「ところで鈴音ちゃん、オヤジとケンカしたんだろ？」

女としてのプライド的な物や、その他心の色々な部分にダメージを受けて若干へこんだ鈴音の様子を、なにやら違う意味に取ったらしい昴が、唐突に切り出した。

「いっ？ え、その……ケンカというか……」

しどろもどろで答える鈴音。

どうやら昴は、鈴音が父親とケンカした事について、自分に相談があるのだらうと踏んでいるようだ。鈴音はその事に気がついた。確かに父である健太郎と少し口論はしたが、昴に相談する程の事でも無い。料理の美味しさで頭から弾き出されてしまう程度の、小さな親子喧嘩だ。

そもそも鈴音が昴の元を尋ねたのは、彼女自身も言葉にするのが難しい、どこか衝動的な想いに駆られての事だった。多分、歌フェスで自信を喪失したであろう昴を、少しでも励ましたい……そんな想いが生んだ、会いたいという気持ちだったのだ。

だが実際に会ってみてどうだ？

昴は落ち込んだ様子も無く、ちゃんと会社にも行っていたようだ。そして自分よりも遥かに手際良く料理を作り、若輩である自分の悩みを聞いてくれようとしている。

彼は、鈴音が感じていたよりもずっと大人の男性だった。

マンガや小説で見るヒーローのように、失敗したら周囲に当り散らし、イジけて何もかも放り出すような無責任な人間では無い。失敗や挫折で傷付き、酷い傷を負ったとしても……痛みを堪えて倒れ

る事無く踏ん張って、歩き続ける事の出来る、強い大人の男性だった。

「え、僕に才能が無いって？ 健太郎が言ってた？」

自分の出る幕じゃなかった。

そう感じた鈴音は、昴の好意に甘えて父と口論になった時の事を話した。

昴には才能が無いと言われた事。事実が……全力で作った曲が、箸にも棒にも掛からない事がそれらを裏付けていると言われた事。そんな事を言えば昴が傷付くかもしれないとは考えたが、それでも良いと思った。そうすれば自分に頼ってくれるかもしれない……そんな無意識での感情が、彼女にそうさせた。

「ま、鈴音ちゃんのオヤジが言う通りだよ。才能無いんだろうね、僕」

あっさりと言って、微笑んだ昴。鈴音の目論みは、あっさりと崩れ去った。

「全く、口悪いよなアイツ。本当に弁護士かよ」

食器を片付けながら、昴はそう言って笑った。無理をしている様子は無く、本当に自然な笑顔だ。

昴は腹が立たないのか？ 才能が無いと言われて平気なのか？ 鈴音は悠然と佇む彼へ、たどたどしい口調でそう問いかける。

「まあ、面と向って言われたら多少はムツとするだろうけど……」

食器を洗って戸棚に仕舞い、二人分のコーヒーを持って音楽室へ

と戻ってきた昴。彼は鈴音の隣に腰を下ろすと、強く言うでもなくごく自然な調子で、鈴音にだけ聞こえるように言ったのだ。

「今の僕は、鈴音ちゃんと音楽を作ってる事が楽しいから、才能がどうか、とかどうでも良い……かな？」

高みへと上り詰める事を諦めているわけではない。だが今は、二人で一歩ずつ進む事が楽しくて仕方ないのだと昴は言った。

以前は歌ってくれる者が誰も居らず、作曲してもイマイチ張り合いが無かったが、今は違う。

「自分の曲を鈴音ちゃんに歌ってもらって、ちゃんとした形になった時の嬉しさみたいヤツ。あの感覚を覚えちゃったら『才能無いから止めちまえ』って言われても、止められないよ」

昴の語る感覚は、鈴音にも漠然と感じる事ができた。

小学生の時だっただろうか？ 父に連れられ、始めて昴の曲に歌を入れた時だ。

完成した曲を聴き、胸が震えた。そしてその曲は鈴音が歌う為だけに作られた、自分たちだけの曲だと聞かされた時、この上なく興奮した事を覚えている。

幼い鈴音はもう一度昴に曲を作って欲しくて、彼の歌姫になりたくて。必死に歌の練習を重ね、父に何度も昴の所へ連れて行けとせがんだ。

「そう考えると僕が音楽続けてるの、鈴音ちゃんに歌って欲しいからって事になるなあ……イマイチ、冴えない曲ばかりで申し訳ないけど」

苦笑いを浮かべてコーヒーを啜る昴の言葉を、鈴音は何度も首を

横に振って否定した。

「そんな事ない！ イマイチなんかじゃありません！」

そして隣に座る昴の方へと向き直り、きっぱりと言う。

「私、スバルさんの曲、大好きです！！　ずっと……ずっと歌いますから！」

突然の大声に少し驚いた為か、それとも別の理由があったのか。胸の鼓動が早くなるのを自覚する昴。その高鳴りが落ち着いた頃、自分へと向けられる真っ直ぐな瞳の真摯さに押し出されるようにして、無意識の言葉が口から漏れた。

「……ありがとう」

その時、二人だけの、二人のための曲が流れた……そんな気がした。

第八話…悪魔を哀れむ歌

大小様々な飾り付けが施されたハリボテの舞台を、無数の照明が明るく照らし出す。明りの中心を狙って何台ものカメラが向けられ、長い棒の先に付けられた大きなマイクが音を拾い集める。

舞台の上、ひな壇のように並べられた椅子に座る何名もの男女。彼らは皆、芸能人と呼ばれる職業の者たちだ。

わざとらしく大袈裟な身振り手振りや良く通る声。あるいは類稀な容姿や生い立ち、機転の利いた発言、持ちネタで、テレビの前で待つ多くの視聴者を楽しませようと日々切磋琢磨する、正に芸の道に生きる人々。

そんな彼らを仕切り、まとめているのが舞台の端、一段高い位置で司会を務める中年の男性だ。

スーツにネクタイ。こざっぱりした髪型で、顔が細長く、多少目が細い。彼の名は島山昭助^{しまやましょうすけ}、四十八歳。多くのレギュラー番組と視聴率を持つ、いわゆる大物芸能人と呼ばれるタイプの人間だ。

「お疲れ様でしたー！ おっけーです！」「お疲れ様です！」

番組収録がひと段落。カメラが止まると同時に出演者の肩から力が抜け、代わりに裏方たちが忙しく走り回り始める。

「ショウスケさん、アガリです！」「お疲れ様です！」「お疲れ様です！」

スタッフが行き交う中を、駆け寄ったマネージャーを引き連れて他の出演者たちよりも一足先に退場する昭助。自分を送り出す声に「おう」と小さく応え、大物芸能人らしい悠々とした態度で現場を後にする。

そうして彼が専用タクシーに乗り込み、その姿が完全に見えなくなって初めて、若手の芸能人やスタッフが緊張から解放される。鬼の居ぬ間に洗濯というわけだ。

だが、緊張から解放されない者もいる。昭助のマネージャーだ。一緒にタクシーに乗り込み、次の仕事を確認しながら様々な案件に頭を悩ませ、それらをどう伝えようかと言葉を選ぶ。気難しく怒りっぽい昭助の機嫌を損ねないように、細心の注意を払っているのだ。

「……で、次はお台場での収録です。所でシヨースケさん？」
「ん、なんや？」

昭助の機嫌が良いと踏んだマネージャーは、今現在抱えている最も大きな案件について尋ねてみた。

「例のチャリティー企画の方、順調ですか？」
「ああ……アレな」

年に一度、テレビ局全体を揚げて催される一大チャリティーイベントがある。世界の恵まれない地域への、募金を集める為に行われるイベント『愛が宇宙を救う』だ。

期間中、街頭ではイベントスタッフによって募金が呼びかけられ、イベント用に製作される専用グッズの売り上げも募金となる。そしてテレビでは生放送で様々なチャリティー企画が行われ、それらによって集められたお金も全て募金とされる。

「シヨースケさんの企画枠、他所の会社が持ってたのを頭下げて譲って貰ったんですから。早めにお願いますね？」

「心配あらへんがな。もう概要は決まっとる」

タクシーに揺られながら、昭助は自慢げに鼻を鳴らす。

「今年は歌や。歌でゼニ集めるんや！ 宇宙を救う専用の歌あ作って、CDやらで売る……これは売れるでえ！」

また始まった……。マネージャーの胃がキリキリと痛む。

昭助の悪い癖だ。いつも思い付きで行動を始める。

それ自体は行動力があるともいえるし、責任感が高じての行動と言えなくも無い。だが問題は……。

「ほんで作詞作曲、ワシがするわ。これやったら流石に売れるやろ！」

「え……！？」

オマエ、曲作りなんてした事無いだろ！

笑顔を見せる昭助の隣で、勢い良くツツコミそうになった自分を必死で押し留めるマネージャー。

出来もしない事をやると言い出す……それこそが毎回マネージャーを悩ませ、あげく胃潰瘍にまで追い込んだ、昭助の困った癖だった。

「……そうですね、たくさん売れますね」

とりあえずの同意。だが一応は本心であるのだから構わないだろう。昭助のネームバリューがあれば、間違いなく売れる。作詞作曲も彼が手がけたと触れ回れば、チャリティーイベントという事で財布の紐を緩めている客の懐に入り込むのは容易い。

「歌はもうちょいしたら渡すよって、CD作る手配だけしとき」
「わかりました。期待してますよシヨースケさん」

ま、ど素人に作詞作曲など出来るはずも無い。十中八九ゴーストを立てる事になるだろうが、他の芸能人だってやっている事だ。気にする必要は無い。

「あ、次の現場が近付いてきましたね。降りる準備をしておきましよう」

マネージャーは良心に痛む胃を隠しながら、甲斐甲斐しく大物芸能人の世話を焼くのだった。

第九話：秘密のデート

校内外に鳴り響くチャイムが、放課後の訪れを告げる。同時に、校舎から溢れ出す生徒たち。

ある者は部活、ある者は帰宅。各々が時間割と言う共通のルールから外れ、それぞれの目的で活動し始める時間帯。高校生である白地鈴音もまた、友人の誘いを断って自身の予定をこなそうとしていた。

「ゴメン、今日もちょっと用事あって早く帰らないとダメなんだ」

手を合わせて頭を下げ、机の横から通学鞆をひったくる鈴音。今日も昴の家でレコーディングがある。だから友達に「用事って何してるの?」と聞かれる前に、この場を離れたい。

自分が歌っている事、その歌をウェブで公開している事。鈴音はそういった話を友人たちに一言も喋っていない。単純に恥かしいからというのもあるが、騒ぎ立てられるのを避ける為、秘密にしているという事情もある。

最近の学校は、ウェブという媒体に対して良いイメージを抱いていない。児童の健全な育成を阻む壁と認識している節がある。そんな場所へ、自校の生徒が出入りしていると聞けば良い顔はしないだろう。

触らぬ神に祟りなし。友人も含め、特に学校には絶対秘密。父や昴と話し合って決めた事だ。

「そういえば鈴音え。私、アンタに聞きたい事あったんだわ」

教室を出ようとした鈴音に、友人の一人が声を掛けてきた。噂好きで知られる少女だ。彼女の、そのニヤけた顔……何か面白いネタ

を用意している時の表情だ。

ちよつと面倒臭いなあ……と思った鈴音だったが、無下にして立ち去るのも感じが悪い。あたり障り無く返事をして、相手の出方を待った。

「この前、オフィス街で男の人と手繋いで歩いてなかった？」
「……！」

あの時か。昴の会社を訪ねて行き、迷子になった時だ。人込みを抜けるまで昴に手を引いてもらったのだが……よりによって、その瞬間を見られていたとは。

一瞬、どう答えた物かと言葉に迷う鈴音。その態度に好奇心を刺激された女子たちが群がり、矢継ぎ早の質問が開始される。

「誰よその人!？」

「男の人ってどんな？」

「かっこよかった？」

「彼氏？」

テンプレートにでも載っていそうな質問の数々。ああ……面倒なっ！

確かに手を繋いだ時、ちよつとドキドキしてしまった。でも昴とは彼氏とかそういう関係では無いし、歌の事以外において、やましい関係では無いのだ。

堂々と、本当の事を言えば大丈夫。

鈴音が考えを纏めて口を開こうとした時、早くも話に尾ひれが付き、妙な事になりつつあった。

「アレ、鈴音の彼氏って本当？」
「私も前に見たよ」

「結構年上だよね？」

「ワリとハンサム」

「年上なの？ まさか援……それ、いけないコトだよ！？」

ああああ……もう、面倒くさい……！

鈴音はこういった女同士の、ゴシップ的な話題が酷く苦手だった。男親に育てられ、父を除けば最も身近な人物が舅であった事が影響しているのかもしれない。

「ちよ、みんなちよつとタイム！」

想像逞しく好き勝手な妄想を膨らませる友人たちを制し、鈴音が口を開く。

「あの人ね、お父さんの友達で、昔からの知り合いなの」

父の用事で落ち合って、迷子にならないように手を引いてもらったのだ……と、多少の嘘は混ざったものの、概ね正しい情報を周囲のゴシップ記者たちへ伝達する。

「なんだ、そうなの？ 彼氏じゃないんだ？」

「ちえ、ちよつとつまんない」

「お父さんの友達なら、親子ほど歳が離れてるもんねえ」

恋愛要素が絡まないととなると、途端に興味が失せるらしい友人たち。

やれやれ、これで帰れる……と思った鈴音へと、最後にぶつけられた言葉が彼女を揺さぶった。

「年上カレシ、別にイイじゃん。付き合っちゃえば？」

その言葉を発した友人は軽く茶化したつもりだったのだろう。だが鈴音の胸で起った波紋は、妙に長く、大きく後を引いた。

富永昂。三十六歳。

物心ついた頃からの知り合いで、いつも優しく、頼りになる。音楽の知識も豊富な尊敬できる大人の男性。最近になって、料理がやけに上手である事も知った。

「ん、いや……流石に、それは無いよ。だって二十も年上だよ？絶対に無いって！」

胸に起った波紋を強引に押さえ込み、鈴音はそう言って笑う。だが「絶対に無い」と言った瞬間、やけに息苦しかった。

「それじゃ、私もう行かないと」

また明日。そう友人に告げて教室を後にする鈴音。それから昂の部屋に赴くまで、胸に起った波紋は落ち着くことが無かった。

——その頃——

「富永くん、このまえ会社の近くで女子高生連れて無かった!？」

「俺も見たぞ! 凄え可愛い娘だった! 手繋いでたよな?」

「ま、まさか援……!! 犯罪だぞ富永!」

「違いますよ! 良く聞いて下さい、あの娘は友達のお嬢さんで……!」

うわぁ……面倒くせえ……!!

第十話：言葉より大切なもの

音が、広がる。

これまでの何倍も、何十倍も。拾い草原を撫でる風がどこまでも走り抜けるように、力いっぱい声が曲の中へと吸い込まれて行く。

「……ん、よしっ！　良い感じだよ鈴音ちゃん！」

キーボードから手を離し、昂が笑顔を見せる。軽く握られた右手は、彼のガッツポーズ。どうやら確かな手応えを感じているようだ。そして同じ手応えを鈴音もまた感じていた。のびのびと気持ち良く歌える。スローテンポの曲なのに、全力で空を飛ぶような爽快感が身体を突き抜けるのだ。

「この曲、なんだか凄く歌いやすいです。思い切り声を出せるって言うか……」

鈴音の意見に満面の笑顔で頷く昂。

久しぶりに見る彼の嬉しそうな顔に、鈴音のテンションも自然と上昇する。

「スバルさん、次っ！　次の所もやりましょうっ！」

「よし、わかった」

キーボードへと手を戻し、伴奏を始める昂。

——やっぱり、これが正解だったんだ。これまでの僕は、間違ってた。

今までの自分は、まだどこかで自分の曲を引き摺っていた。鈴音ちゃんの曲を書いているつもりで、昔のままの……鈴音ちゃんが居

なかった頃の曲を書いていた。

それじゃ駄目だ。

彼女が……鈴音ちゃんが僕へ信頼を示してくれたように、僕も鈴音ちゃんを……僕の、僕だけの歌姫を信じて、本当の意味で彼女へと贈る曲を作らないと！

「……どうですか、スバルさん！？」

「うん、完璧！ 凄く良い声が出てる」

額に滲んだ汗を拭い、満足げに微笑む鈴音。この瞬間の為に息をしている。そう表現しても差し支えない、満ち足りた表情だ。

「よし、この辺で飲み物でも飲んで少し休憩にしよう……ポカリで良い？」

頷き、鈴音は少し温めのスポーツドリンクで喉を潤す。その間に昂は録音した曲を編集、保存して曲を完成へと近づけて行く。その楽しげな横顔に見惚れながら、鈴音は思った事をそのまま口に出してみた。

「ねえ、スバルさん。この曲……良いですね。私、これまでで一番だと思います」

「そっか、それなら僕も嬉しいよ。これまでの曲は鈴音ちゃんの広い音域に甘えてた部分が多かったから、この曲は得意な音域で歌えるように調整を……」

昂が今回の曲について、専門的な話を始める。彼の蘊蓄を聞くのが嫌いでは無い鈴音だが、その内容は半分も理解できない。

「……ふうん？ そうなんですね？」

「あゝ……えっと、まあつまり……本当の意味で鈴音ちゃんの専用曲って事。鈴音ちゃんが良くわかんなくても、思い切り歌えば曲が合わせてくれるから」

良くわかって無い事に気付かれてたかとテレ笑いを浮かべる鈴音に微笑み返し、昴は手元のノートに新たな符号を書き込む。

昴のノート。鈴音がそう呼ぶ薄汚れた大学ノートは、作曲や音合わせの際に昴がメモ帳のようにして使うノートだ。表紙に使い始めた日付だけが書かれたシンプルなノートは、ざっくりとした曲の流れや、その場で思いついた事を書き込んでおく為の物。いわば昴のネタ帳である。そうしておいて、後でパソコンを使って曲へと反映させるのだ。

「ところでこの曲、いつ頃アップするんです？」

「うゝん……本当は、もう少しノンビリと作るつもりだったんだけど……」

腕を組み、椅子の背もたれに体重を預ける昴。以前はこのポーズを取る度にギシリと鳴っていた椅子が、今はもう鳴らない。随分と体重が落ちたのだ。

歌フェスで実力の違いを突き付けられ、そこから半年。態度にこそ出さないが、失意の中から抜け出すのに相当なエネルギーを使ったのだろう。そして鈴音は知らなかったが、仕事においても理不尽な理由で努力を水泡に帰された昴。その気苦労は計り知れない。

「もう少しすると、例の『愛が宇宙を救う』の関連動画でニロニロが溢れると思うんだ。んだから、全体の投稿数が少ない今の内に完成してる一番だけでも投稿して、ちょっとでも注目されようと目論んでる」

「ああ……毎年、凄いですもんね」

愛が宇宙を救う――毎年の恒例行事に近い扱いとなっているこの大規模チャリティーイベントでは、全国各地で公開生放送がほぼ同時に行われる。それらを個人的に撮影する者は多く、時期が来ると投稿動画サイトはそういった個人撮影動画で溢れかえるのだ。

「宇宙を救う、スバルさんは見るんですか？」

「……見ない。司会がキライ」

今年の総合司会は島山昭助。彼のお陰で自分の企画が抹消されてしまった昴にとってすれば、顔も見たくない相手だ。

「ふうん？　そうなんですか」

昴が人の好き嫌いを言い出すのは珍しい。事情を知らない鈴音は意外に感じながら、何気なくテレビのスイッチを入れる……と、音楽室の隅に置かれた小さな液晶画面に渦中の人物、島山昭助が映し出された。

『ガハハハハ、なんでや！　ンな事あるかいなあ！』

親しみやすい笑い声と、独特のイントネーションを持つ関西弁。合成で追加されたガヤもあり、彼が司会を務める番組は盛り上がっているようだ。

面白みの無いゲストをスクランダラスな話題で弄り、自分へと向けられるコメントには素早く切り返してシニカルな笑いを取る。名ばかりの大物とは一線を画す実力者の姿が、そこにはあった。

『彼はな、そういう事やねんて。オレにはわかるねん。辛かつ……』

突然、ブチッと液晶画面が暗転した。

「あ、スバルさん何するんですかっ！ 私、見てたのに！」
「こいつ、キライだもん」

昴がテレビを切っていた。テレビの向こう側、手の届かない存在であるキライな芸能人への、小さな反抗である。

「休憩中くらい好きなテレビ見せて下さい！ 大人でしょう！？
ガマンすれば良いじゃないですかっ！」

「ヤダ。ヤツからは毒が出てる。危険だから見たくない」

喚きながら、テレビのリモコンを奪い合う二人。

そんな昴と鈴音、二人の会心作がニロニロ動画で波紋を呼ぶのは、この時から一週間後の事である。

第十一話…予感

高級マンション、高層階の一室。鈴音の父である健太郎が経営する、白地法律相談所の事務所兼自室。

パソコンに向かい作業をしていた父の耳に、愛娘の明るい声が飛び込んできた。

「お父さん、ちょっと良い！？ 見て見てっ！」

自分とパソコンの間にスリと割り込んだ娘は、覚束ない手付きでウェブブラウザを起動させ、お目当てのページを表示させる。昴と鈴音が曲を投稿している動画共有サイト『ニロニロ動画』のトップページだ。

全てのデータが読み込まれるのも待ちきれない様子で、検索窓に曲名と思しきタイトルを入力する鈴音。

「……この間お前らがアップした曲だったら、もう聴いたぞ」

『ギフト』。それが昴と鈴音、二人の新曲だ。

「歌詞が多少ヲタク臭かったけど、中々……」

「感想は良いから、もう一回！ ほらほら、ココ見てお父さん！」

鈴音は父の都合に構う事無く、画面の端を指差してはしゃぐ。そこには閲覧者によって曲が再生された回数が記録されていた。

「ん……おお？ どうしたんだよ今回、かなり多くないか？」

そこには健太郎が桁を二つ読み違えたかと思うような再生数が表

示されていた。ざっと、普段の百倍である。

「凄いでしょ！？ それに今回は、コメントも結構付いてるんだよ！」

これまでは、意味のあるコメントなど付いて一つか二つ。ところが今回の『ギフト』には、既に百を超えるコメントが寄せられている。更にそれらの多くがポジティブな物——名曲、お気に入り、最高——そういった言葉が連ねられていた。

「どうしたんだよ急に。確かに俺も、今回の歌は悪くないって思ったけどよお」

信じられないといった調子で、娘から取り上げたマウスを弄る健太郎。ランキングが掲載されているページへと表示を切り替えてみれば、アクセスランキングで四百二十位。楽曲カテゴリでのランキングも九十八位と、数千、数万の動画が集まるニコニコ動画において大健闘を見せている。

「……マジかよ」

「ね、凄いでしょ！？ やっと私たちの時代が来たよ！ スバルさんと苦勞した甲斐があったよお！」

今にも泣き出しそうな顔で喜び、跳ね回る鈴音。若年とはいえ、小学校の頃から十年以上にも及ぶ長い下積み生活。その苦勞が糧となり、ようやく芽を出し世間に認められたのだ。喜びも一入だろう。

「良かったな、鈴音。よく頑張った」

「……うん！」

抱擁を交わし、喜びを分かち合う父と娘。

昂に娘を任せて良かった。こんなにも喜びに浸る娘の姿を見る事が出来たのだから。

健太郎は自分の判断が誤りでは無かった事を確信し、同時に友へと最大限の謝意を送る。

「そういやあ、スバルのヤツはこの事知ってんのか？」

「ううん、多分まだ知らないと思う。仕事してるだろうし……あ、でもそろそろ家に戻るのかな？」

「んじゃあ早速教えてやろうぜ！ アイツの事だから、喜び過ぎて死ぬんじゃない？」

父の軽口に苦笑しつつ、携帯で昂を呼び出す鈴音。電話の向こうで何度かコール音が鳴り……唐突に途切れる。

「んー、ダメみたい。なんか、切られちゃった。スバルさん、まだ仕事中なのかなあ？」

「そうか。じゃ、また後で掛けようぜ……祝勝会の呼び出しも兼ねてな！」

父の言葉に飛び上がって喜ぶ鈴音。踊るようにグルグルと回りながら部屋中を駆け回り、上がりすぎたテンションをそこら中に撒き散らしている。

そんな娘の姿を眩しげに見つめる健太郎。彼は腕時計に目をやり、そっと眉をしかめた。

おかしい。なにか違和感を感じる。

漠然とした不安。

そして健太郎の感じた悪い予感、現実の物となる。

第十二話：死神の勤怠管理

真っ直ぐ伸びた長い廊下。壁に張られた無数のポスター。それらの掲示物には全て『愛が宇宙を救う』の文字が躍っている。

ここは某テレビ局の某スタジオ。出演者の楽屋が並ぶ一角。

その内の一つ、ドアの入り口に『島山昭助様控え室』と書かれた部屋から、音楽が流れ出していた。

「これ、昭助さんが作曲したんですか！？　凄いですね、良い曲ですよ！」

小型の音楽プレイヤーから流れる曲に、番組スタッフが驚愕の声を上げる。

「そうやろ？　素敵やろ？　無償の愛をイメージしてるんや」

楽屋の中央。ゆったりとした椅子に腰掛けて、昭助は満足げな笑みを浮かべた。

ほう、と感嘆の息を漏らすスタッフ。この楽屋では現在『愛が宇宙を救う』の打ち合わせが行われていた。

多忙を極める昭助の、僅かな余暇を利用しての打ち合わせ。内容は主に、彼が担当するチャリティー歌企画の詳細について。

「ですが昭助さん、この歌詞だと『無償の愛』というよりは『互いに支えあう愛』って感じですね……」

歌の歌詞を素早くメモしていたスタッフがぽつりと漏らす。昭助の語る全体イメージと、歌の内容がそぐわないのだ。

「ああ、歌詞はまだ仮やから。明日にでもチョイチョイつと変えて連絡する。お前らは曲の感じを、もう少しエエ感じに調整してもらえるか？」

「そうでしたか、わかりました。では編曲はこちらで……えっと、そうなりますと曲のソースは一旦預からせてもらって……」

ここでいうソースとは音源の事だ。曲を形作る要素、つまり歌声や楽器の音、それらを生み出す楽譜の類も広く含まれる。

「あん？ ソース……？ いや、あかん。渡せるモンは、それしかない」

小型の音楽プレイヤーを指差して答える昭助。その物言いに固まっていたスタッフだったが、彼とてプロ。何事も無かったように「わかりました」と答え、プレイヤーからデータの入ったメディアを抜き取る。

「では後日、こちらで調整した物に歌を入れてお届けしますね。歌手は……」

「お前らに任せるわ。若い実力派の娘だったら誰でもエエ」

頷いて手帳にメモを取り、挨拶を残して楽屋から退室するスタッフ。これにて打ち合わせは終了。そして昭助の休憩時間も終了する。時計を確認し、よっこいしょ、と立ち上がる昭助。

「もうそろそろ時間やろ？ そろそろ……あ？ 何しとん、お前」

昭助が視線を向けた先。そこでは彼のマネージャーが、強張った表情で立ち竦んでいた。

第十三話…監獄ロック

生暖かく湿った空気。カビとプラスチックが混じったような独特のニオイ。

薄暗い蛍光灯の下を歩きながら、弁護士、白地健太郎は眉根を寄せて不快感を露わにする。

ここは警察署内の、留置場。逮捕された者が身柄を拘束されている場所。弁護士である健太郎にとっては比較的馴染みのある施設であったが、何度来ても嫌な雰囲気を感じてしまう。

刑事に伴われて、鉄製ドアの前へ。脇のインターホンを押して、部屋の中へと通される。

「……何してんだよオマエ、こんなトコで」

声を掛ける健太郎。留置場のガラス越し、彼に曖昧な笑顔を返したのは、親友……富永昴だ。

「詳しく話してみろ」

「ああ、わかった……って言っても、俺だって何がなんだかわかってないんだけどさ……」

昴が語ったのは昨日の事。

早朝、ドアを激しく叩く音で昴は目覚めた。ドアの前に居たのはスーツを着込んだ数名の男性。彼らは何事か文章が印刷された紙を昴へと突きつけ、自分たちは警察で、今から家宅捜索を行います、と告げた。

「で、パソコンとか調べられて任意同行とか言われて、取調べとかされて……今だよ」

「そうか」

腕を組み、黙って話を聞いていた健太郎が、軽く咳払いをして口を開く。

「良く聞けよスバル。お前は今、著作権法違反の罪に問われてる。知的財産権の侵害ってヤツだ。概要はわかるよな？ 心当たりあるか？」

口調こそいつも通りであったが、語る内容は弁護士のもそれだ。

自分の現状をある程度予測していたのだろう。昂も特に驚く様子は見せず、健太郎の問いに答える。

「心当たりだろ？ 警察からも聞かれたんだけど、それが全然……」

「隠すなよ？ 正直に話せ」

「本当に……マジで無いんだ」

話を聞きながら、親友の顔をじつと見つめる健太郎。昂が嘘を付いているようには、とても見えない。そもそもこんな事で嘘を付くような奴では無い事を、長い付き合いの中で十分心得ている。そうでなければ可愛い娘を預けたりするものか。

「スバル、掻い摘んで言うと、お前の曲『ギフト』がパクリだって訴えたヤツがいる。で、今回の逮捕ってワケだ」

「お、おい待てよ。あの曲は……！」

「わかってる。お前のオリジナルだって事は、俺だって知ってる」

予想外の事実を告げられた狼狽と怒り。それらが態度に表れる昂に対し、表情を全く変えない健太郎。自信満々、落ち着き払ったようにも見える健太郎だったが、内心では昂以上の狼狽、そして怒り

を感じていた。

件の曲が昂の、そして鈴音のオリジナルだという事は他ならぬ自分自身が知っている。だが捕まってしまった昂。警察とて証拠も無しには動かない。そう考えると……。

「ハメられた……か？」

呟く健太郎。

軽く考えをまとめ、今後の事について話しておこうとした矢先。監視員から「時間です」とのお達しがあった。

「チッ！ まあいいや……おいスバル、落ち込むな。気合で元気出せ！ んで……」

暗い表情を見せる親友へ、健太郎は短い言葉を掛ける。

「俺に任せとけ！」

「……………任せた」

少しだけ明るくなった友の顔に背を向け、留置場を後にした健太郎。警察署の前に出ると深呼吸を繰り返し、外の新鮮な空気を胸いっぱいに取り込んだ。そしてシステム手帳を開き、ビッシリと詰まっていた今後数ヶ月の予定を全て削除した。

「絶対、勝つ！！」

弁護士、白地健太郎の戦いが、いま始まった。

第十四話..やさしい悪魔

某テレビ局内、某スタジオ。

仮組みされたセットの前で大勢の人が動き回り、床に目印を貼ったり、周囲の者に指示を出している。どのスタッフもシャツの袖を捲り上げ、額に汗して真剣な表情。一ヵ月後に控えたチャリティー番組『愛が宇宙を救う』のリハーサルが行われているのだ。

「ここからCM挟んでショースケさんのコーナー入ります！」

「よっしゃ、俺の出番やな」

セットの裏から昭助が進み出た。

ここから先は昂の会社から奪った枠で行われる、昭助の持ち込み企画。歌によるチャリティー活動のリハーサルが主となる。

「えー、企画趣旨は無償の愛。コーナータイトルは『歌声を愛にかえて』です。なお、このタイトルは同時に番組テーマソングのタイトルであり、全体のキャッチコピーともなっております」

「そういうこっちゃ。この俺が日本中のモン泣かしたるで！」

進行を取り仕切るスタッフの声に昭助が意気込むと、どこからか拍手が湧き出す。

昭助が作ったとされる曲『歌声を愛にかえて』は、既にCDのジャケットが完成し、歌手も決まりレコーディングも始まっている。思いのほか出来が良かった為に番組全体のテーマソングともなり、近々には昭助の看板番組で宣伝も兼ねて紹介される予定だ。

「流石はショースケさん、作曲くらいお手の物ですね！ 以前は絵画にも挑戦されてましたけど、芸能人より芸術家の方が向いてるん

じやありませんか？」

「そうかもなあ。俺、若い頃は今で言うシンガーソングライターなりたかってん。それでギター買ったんやけど……」

企画のメインとなる曲が順風満帆である事も手伝ってか、リハールは大きなトラブルも無く終了。昭助は上機嫌のまま、マネージャーと共に次の収録場所へと向うタクシーに乗り込む。

「あの歌は売れるでえ。今年のチャリティーは大成功間違い無しやわ」

「そ、そうですね。名曲だと……思います」

「……？ この前から、どないしたんやお前。様子おかしいで？」

話が件の歌に及ぶ度、歯切れの悪くなるマネージャーに昭助は「心配事があるなら言ってみろ」と告白を促す。

二人だけしか乗っていないタクシー。運転手は気を利かせ、ラジオの音を大きくして耳栓代わりとした。

「はい、では……い、言わせて頂きます。昭助さん……あの曲、本当は誰が作ったんですか？」

青い顔でそう聞いたマネージャー。真剣な表情で強く両手を握り締め、酷く緊張しているように見える。

だが昭助はマネージャーの緊張とは裏腹に、気楽な笑顔で応えた。

「なんや、神妙な顔しと思うたら、そんな事かいな。お前が心配するようなコト、なんも無いわ」

「ですが、あれはっ……！」

追求を深めようとするマネージャー。昭助は心配性な彼の言葉を

指先で遮り、笑顔のまま、声を低くして囁く。

「エエか、良く聞いとけよ。あの『歌声を愛にかえて』は他の誰でもない、俺の曲や。もし……もしも、やで？　アレが自分の曲やっ
て言う輩がおったとしたら、そいつは……」

昭助は椅子の上で姿勢を正し、ネクタイを締めなおして真顔で言うのけた。

「俺の曲、盗作したんやろな」

第十五話..傷だらけの人生

なるほど、シャバの空気はウマイと聞くが、これは確かに……。

「ウマイなあ……」

呟き、大きく背伸びする昴。久々に足を下ろした外の世界は、留置場から出てきたばかりの彼の目に、どこか輝いて見える。

突然の逮捕から約一ヶ月。ようやく拘留期間を終え、保釈される運びとなった昴の姿がそこにあった。

といっても無実が証明されたわけでは無く、一ヵ月後には裁判所で第一回の公判が行われる予定となっている。そこから一年以上にも及ぶであろう長い裁判期間を経て、判決が下されるというわけだ。

「とりあえずアパートに戻るか」

ノタノタと歩き出す昴。

どうにも現実感が無い。オリジナル曲『ギフト』が高評価を受けた辺りから、未だ夢の中に居るのでは無いかとさえ思える。

「というか、これが夢だったらなあ……」

ボソリと呟く。留置所で独りだった為か、随分と独り言が増えてしまった。

逆に減ったのは睡眠時間と体重だ。毎晩、明け方に浅い眠りを僅かな時間しか取れず、その為なのか体重は七キロも減った。

「仕事、どうなったんだろ？ 席、まだあるかな」

健太郎の手配で仕事は有給扱いになっている筈だ。しかし一ヶ月の間、警察沙汰で欠勤した従業員を何の咎も無く受け入れる大らかな会社など、日本に数えるほどしか無いだろう。良くて減給、悪ければ……。

「クビ、か？ 貯金も無いし、マジでどうしよう？」

困り果て、足下だけを見て歩く事しばし。昴の身体は、いつの間にか自宅アパート前に立っていた。

見慣れた風景、見慣れた建物。一ヶ月程度の留守であったにも関わらず、くたびれたオンボロアパートが酷く懐かしく感じる。

ギシギシと鳴る階段を登る内、気持ちは多少なりとも上向きになる。留置所で夢見た安らぎの我が家が、すぐそこに待っているのだ。しかし――。

「……な、なんだコレ？」

ドアを開け、我が家へと戻った昴を待っていたのは、滅茶苦茶に荒らされた室内だった。

戸棚の中身は全て引っぱり出されて床に散乱し、その上には割れた食器が積み重なっている。

「……そうだ！ 音楽室……っ！」

お手製の防音扉を開けて、慌てて飛び込んだ音楽室。

するとそこには……何も、無かった。鈴音と二人、コツコツと音を練り上げた思い出の部屋は、何の面影も無い、単なる空き部屋となっていた。

警察に押収されて元より無かった楽譜やパソコンを始め、キーボードやアンプ、スピーカー、マイクといった機材、ご丁寧にケーブ

ルの類まで一切が消え失せている。

「一体、どうなっ……?」

ふと目線を上げれば、目に入るのはガムテープを貼った上で割られた窓ガラス。

「おいおい……よりによって、このタイミングで空き巣かよ」

溜息と共に、その場へ崩れ落ちる昴。

「冗談だろ……もう、泣きてえよ」

弱り目に祟り目。頭に浮かぶのは、そんな言葉だけだった。

——その頃——

「お、コレやな、いわゆるソースとかいうモンは」

自室にて、薄汚れたノートペラペラとめくる昭助。そこには五線譜が引かれ、しっかりとした文字で解読不能な記号が所狭しと描かれている。

「音符か? なんやよわからんけど、専門家が見たらわかるやろ。しかし何冊あるんや……」

昭助の足下に高く積まれた、同じようなノート。表紙に刻まれた日付は、二十年近く前から始まっている。

「コツコツと頑張ったんやなあ……泣かせるで。よし、俺に任しと

け。お前の……いや、俺の作った曲で日本中を感動させちやるわ!」

第十六話…黄昏少女

鈴音は、気の晴れない日々を過していた。

学校へ行っては帰る、行っては帰るの繰り返し。何事も無く、淡々と続く毎日。それは昴が逮捕され、父より「長くかかりそうだ」と聞いた日から始まった、つまらない毎日。

昴の家へとレコーディングへ行く日々が、新曲の完成を心待ちに過す週末が、どれほど輝き充実していたか。それを今更ながらに実感させられて、他に何をする気も起らずダラダラと時間が過ぎるのを待つだけ。

そして今日もまた、暇潰しの友であるテレビの前に居座り、学校から帰った制服姿のまま、お菓子を片手にボンヤリと画面を眺める鈴音。

テレビに出て笑いを取っているのは、島山昭助。確か昴がキラリだと言っていた芸能人だ。

「スバルさん、今頃何してるんだろ？　ちゃんとごはん食べてるのかなあ……？」

思い出される昴の笑顔。もう彼とは一ヶ月以上も会っていない。鈴音も関係者という事で、面会を禁じられている為だ。

子供の頃に昴と出会って以来、これほど長く離れ離れになったのは初めての事。同時に、これほどの長期間に渡って歌わなかった事も初めてだった。

健太郎からは「暇なんだったら勉強でもするか、歌の練習しとけ」と言われているのだが、こんな憂鬱な気分ではとても歌う気にはなれない。勉強など、もっての他だ。

早く時間が過ぎないかな……。

明るい笑い声を響かせるテレビの前でそんな事ばかりを考えてい

ると、ふいに聞き覚えがあるメロディーが流れた……気がした。

「あれ？ 今の……」

キョロキョロと周囲を窺う鈴音。

空耳だろうか？ いや確かに聞いた事のあるメロディーが流れている。ゆっくりとした流れではあるが、小刻みに配された音が波打って繋がり、疾走感を生む。幾度と無く聞いたこの曲は……。

「『ギフト』だ！」

弾かれたように顔を上げ、鈴音は今日初めてテレビに注意を向けた。

点けっぱなしとなっていたテレビでは、昭助からの紹介を受けた若い女性歌手が『愛が宇宙を救う』のテーマソングをお披露目しようとしている所だ。

画面に『歌声を愛にかえて』とのタイトルテロップと共に、作詞・作曲、島山昭助の文字。そして聞き覚えのある『ギフト』のメロディー。

「これって……」

最初は偶然の一致かと思った。だが、曲が歌詞の部分に入り、疑いは確信へと変わる。

テレビで『歌声を愛にかえて』として流れているのは、昴と鈴音のオリジナル曲『ギフト』そのものだ。

歌詞の所々や、高音、低音で音の変化する難しいメロディーには変更が加えられていたが、それ以外の部分は鈴音の記憶と全く同じ。特徴的なサビに至っては、完全に一致している。

「同じ曲……だからスバルさんが捕まった？」

ここ一ヶ月、ほぼ停止状態にあった鈴音の脳が活動を再開する。昂が捕まった理由を、鈴音は知的財産権の侵害であると父から聞いていた。詳細は知らないが、現状とあわせて考えると『ギフト』に盗作の疑いが掛けられての逮捕だったのだろう。

だが鈴音は知っている。『ギフト』が盗作では無い事を。特に歌詞に関しては、その大半を鈴音も一緒になって考えたのだから間違いは無い。

「うん、スバルさんは無実。という事は……」

誰かが『ギフト』を見つけ、自分の曲として発表したいと欲したのだろう。『ギフト』は自分の曲だと嘘を言い、証拠をでっち上げて警察まで動かして、法的に奪い取ってやろうと考えたのだ。

そしてまんまと昂は逮捕され、『ギフト』は『歌声を愛にかえて』として全国のお茶の間に流れた。これで世間の大半は『ギフト』を誰かの……島山昭助の曲として認識しただろう。

鈴音がそこまで考えた時だ。

「あゝ、見ちゃったかぁ……。ま、その内言おうとは思ってたんだけどさ」

多少の後悔を含んだ、思慮深い声がした。健太郎だ。

いつの間に帰っていたのか鈴音のすぐ横に立ち、一緒になってテレビに視線を送る。

「……………」

「……………」

無言の二人。ただテレビだけが、いまや『歌声を愛にかえて』となった『ギフト』を流し続ける。

多数の電飾で彩られたステージの上。眩いライトが明滅し、白煙が吹き上がる。そこで声を張り上げる若い女性。歌唱力には定評のある、新進気鋭の歌手だ。音を外す事無く、難しい箇所も勢い良く歌い上げている……しかし。

「少し変……かも」

ぽつり、と鈴音が呟いた。

微かな違和感。曲と歌との間に生じる不協和音が、耳の端を掠める。

「そりゃ、そうだろう」

応える健太郎。

「『ギフト』はスバルが、鈴音の為に作った曲だ。他人が、お前より上手く歌えるワケ無えだろう」

その言葉に、鈴音の脳裏へ鮮やかに蘇る『ギフト』を作っていた二ヶ月前の記憶。

全体のメロディーを覚え、歌っては撮り直し、修正しては歌うを繰り返した日々。

歌詞について話し合い、メロディーを合わせ、行き詰まりつつも前進して、ようやく一番だけを完成させた。

そしてニロニロ動画に投稿して、好評を得て……。

「……お父さん」

テレビでは、歌手が二番を歌っていた。
オリジナルの『ギフト』では未完成だった部分が、手の届かない
場所で改竄されて日本全国に流れて行く。

「わたし……悔しいよ」

震える声。

「これ……わたしの歌なのに……スバルさんの、曲なのに……
…！」

テレビの中で喝采を浴びる島山昭助と女性歌手を他所に、マンシ
ョンの一室には少女の悲しげな嗚咽が聞こえていた。

第十七話…決戦は金曜日

街頭に、真っ青の募金箱を持って立ち並ぶ人々。そこへ財布から小銭を取り出した通りすがりの人が、善意の募金を行っては去って行く。

某テレビ局の大規模チャリティー企画『愛が宇宙を救う』が、今まさに開催中なのだ。

テレビの生放送も開始され、日本各地で青色のTシャツを着たスタッフが、明るく朗らかに感動を伝えようと走り回る。

「おし、勝ちに行くぞ！」

そして今日は、昂の裁判が行われる日でもあった。

健太郎はシワ一つ無いスーツに身を包み、気迫漲る表情で裁判所前に立つ。

「頑張ってるね、お父さん！ 応援してるから！」

彼の背後には、緊張の面持ちで父へ声援を贈る鈴音の姿。手には何故か、真新しい大学ノートが握られている。

「ああ、心配すんな鈴音。って、裁判は俺に任せておけば大丈夫だけれどよ。お前も予定通りに動けよな？ そっちの方が心配だぜ」

おどけたように言った健太郎に対し、真剣な眼差しを返す鈴音。その生気溢れる目には、一ヶ月前の無気力な少女の面影は、無い。

「大丈夫、私だって……絶対に負けないから！」

「よっしゃ、その意気だ」

愛娘に別れを告げて、裁判所へと踏み込む健太郎。長い廊下を抜けた先、被告人の控え室に、彼を待つ人物が居た。

「ケンタ……」

昂だ。

どこか疲れたような表情で長椅子に座っていたが、健太郎の姿に気付くと立ち上がって友を迎える。

「任せたぞ」

「おう、任せろ！」

短く言葉を交わし、視線で頷き合う男二人。

こうして昂と鈴音と健太郎の、長い一日が始まった。

第十八話…子連れ狼

予想通り、というべきだろう。

第三回目となる今回の裁判も、初っ端から相手側のペース。押されっぱなしだ。

――落ち着け、俺。怯むな！

健太郎は背中に滲む嫌な汗を感じながら、冷静になろうと努めていた。

「被告人、豊永昂はタレント、島山昭助の作った楽曲『歌声を愛にかえて』を模倣。インターネット上で……」

原告である昭助（今回は欠席していたが）の権利を主張する原告側弁護士。彼らが次々に出してくる証拠品に対し、弁護士側である健太郎には証拠となる品が殆ど無かった。

今回の裁判に関わりそうな音楽関係の物品が全て警察に押収されていた事に加え、僅かな望みが掛かった他の証拠品も、昂の家が空き巣被害に合った際、何処かへと持ち去られてしまった為だ。

「これは、島山が作曲の際に使用していた楽譜です。クシヤクシヤで継ぎ接ぎとなっているのは、ゴミの中から発見された為です……被告人が出したゴミの中からね！ つまり……」

「だから？ 互いに同じ曲を作曲したって主張してるんだ。同じ楽譜が見つかったても、証拠にはならない」

原告側の出した証拠に対し、健太郎が切り返す。

ちらりと被告人席へ視線を投げると、昂が小さく首を横に振って合図している。これは身に覚えの無い証拠という合図……つまり、捏造というわけだ。

小さく舌打ちをする健太郎。原告側が出す証拠の殆どが捏造だった。そして昴が有利になりそうな証拠は全て消し去られている。押収されたパソコンのデータしかり、ニロニロ動画のサーバログしかり、だ。

著作権を扱う裁判は判断が難しい事もあり、それら捏造品を用いた原告側の主張は被告側にとって致命的な物とはなり得なかった。しかし二人は、確実に追い詰められている。

「被告人、富永は同僚にも自分が作曲をしている事を秘密にしていた。これは後ろ暗い事があったからではありませんか！」

「それは……！」

原告側の言葉へ咄嗟に反論できない自分に、崩れ落ち、小さくなる足場を実感する健太郎。どっと汗が増える。

かなり追い詰められてしまった。正直、崖っぷちの大ピンチだ。後が無い、どうする……？

苦しい健太郎は、無意識に被告人席へ立つ昴へと視線を走らせた……その瞬間。

「……ぷっ！」

笑いを堪えきれず噴出す健太郎。

被告人席で昴は、脚を肩幅に開いて腕を組み、口をへの字に結んで背筋を伸ばし、やぶ睨みでまんじりともせず立っていた。貧相な仁王像、といった雰囲気だ。

確かに裁判前、昴へ「堂々と立ってろ」とは言ったが、あんなに堂々と立たなくても……あれじゃ完全に、裁判官へケンカを売る空気の読めないオッサンじゃないか。

生真面目な友人の姿が、普段の健太郎を呼び戻す。

「……弁護人？」

「っと、失礼しました。富永が同僚に対し、自分の趣味を秘匿していた理由は……」

健太郎の肩から力が抜け、汗が引いた。この場で最も不安なのは、覚えの無い罪を被せられている昴だ。その彼が、内心を隠して誰に恥じるでも無く立っている。それは全て自分への信頼、その現れでは無いか。

昴は「任せる」と言った。だったら任せてもらおう！

「彼が、未成年の娘と半同棲の関係にあったからです！」

「ぶうっ!？」

堂々と立っていた昴の顔色が変わる。

もうちょっと違う言い方があるだろう!？ 無言で抗議する昴。

だが健太郎は容赦が無い。

「作曲の事実がバレれば、自分の曲を歌っている人物を探られる。その人物こそが半同棲中の未成年女子であった為、社会人である彼にとっては体裁が悪く、周囲に言い出し難かったという事実があります。またレコーディングは夜間に行われる事が多く、その事が無粋な憶測を招く事も嫌い……」

半同棲は言いすぎだったが、ほぼ事実だ。

後で昴が各方面から色々と妙な目で見られるかもしれないが、これでとりあえずの危機は乗り切った。まあ原告側だって、知っていた黙っていたのだろうが。

この難しい裁判を、無血勝利で飾ろうなどという考えが甘かった。多少のダメージは覚悟の上で切り抜けるしか無い。

「もしや被告人はその未成年女子と肉体関係が……」
「ありません！！ それに今回の裁判と二人の関係は関連性が無い
！」

怒鳴るように言って、原告側の追及を封殺する健太郎。

追い詰められ肉を削られる中、彼はじつと敵の骨を断つべく反撃のチャンスを伺っていた。

第十九話…戦場のボーイズ・ライフ

何本もの車道が交わる交差点。その周囲を歩行者天国とし、更に中央部を封鎖して、そのステージは設置されていた。

太い電源ケーブルが何本も繋がった大型トラック。そのボディが大きく展開し、『歌が宇宙を救う』チャリティーコンサートの舞台となる。

既に周辺は大勢の人ばかり。足の踏み場も無く、周囲のビルから窓越しにステージを眺める見物客も多い。

「もう時間が無いぞ！ 機材の立ち上げ急げ！！」

「中継車が渋滞に捕まって、少し遅れるそうです！」

「なら中央公園に回してる車を融通してもらえ！ ショースケさんの指示だって言えば大丈夫だ！」

慌しく走り回るスタッフ。

ここで行われるのは公開生放送。失敗は許されない、一発勝負の舞台。準備は入念に行って来たが、突然のトラブルというものはどんな現場でも起り得る。

「おい、あのトラックなんだ？」

設営準備スタッフの責任者が、歩行者天国の端に停められた小さなトラックに目を止めた。

放送機材関連会社のロゴが入った、ごく普通のトラック。だが準備機材にああいった車両は含まれていなかった筈だが？

「さっきプロデューサー連絡ありまして、状況次第でサプライズ演出を行うから、その機材だと……」

「なっ！ あの無能野郎、現場に断りも無く勝手な事しやがって！」

大声で毒づく設営責任者。相当な不満が溜まっているようだ。

「どうします、チーフ？」

「構わん、ほっとけ！ プロデューサーが言い出した事なら、自分でなんとかするだろ！ 邪魔になるようなら、蹴っ飛ばしてどかしとけ！」

こうして最前線で起った小さなトラブルは放置され、設営準備は着々と進んで行った。

第二十話：逆転裁判・終幕

裁判所。

まだ昴の裁判は続いていた。

「……あの弁護士、しぶといなあ」

「もう必死って感じだよな。でも、流石にもう瀕死だろ」

「傍聴席、お静かに願います」

粘る健太郎。彼は満身創痍となりつつも、冷静に、ただ一度のチャンスを待ち続けていた。

だが、その頑張りも限界に近付きつつある。

「……と、このように被告人、富永昴は原告の出したゴミから楽譜を持ち去り、書かれていた曲を……」

健太郎に止めを刺すべく、概要をまとめつつ包囲を狭める原告側弁護士。最早、原告側の主張が優勢である事は誰の目にも明らかであり、判決を待つべくも無い状況にある。

「この事から、富永昴は……？ ん、何だ？」

その時、法廷内に軽快な電子音が鳴り響いた。

健太郎の携帯が鳴ったのだ。

「弁護士、法廷で携帯電話の電源は……」

「失礼、ちょっと待って下さい」

裁判官を押し止め、電話に出る健太郎。

電話の向こうと二、三、言葉を交わした彼の表情に、会心の笑みが浮かぶ。

「弁護士、もうよろしいですか？」

「ええ、失礼しました……けれど、ここでちょっと確認させて欲しい事が出来ました」

ネクタイを締め直し、原告側弁護士へと向き直る健太郎。

「そちらの主張だと、被告は証拠品の楽譜から曲を起こしたという事になっている……この楽譜から」

提出されていた楽譜を摘み上げ、彼は続ける。

「ご覧の通り、この楽譜に歌詞は書かれていない。しかし『ギフト』と『歌声を愛にかえて』の歌詞は酷似している。この理由を原告側は、テレビ放送された同曲の歌詞を真似た、としている。間違いないですね？」

頷く原告側弁護士。それを確認した健太郎は、ここぞとばかりに大きな声で主張する。

「だがしかし！ 被告人が作曲した『ギフト』はテレビ放送よりも一週間前、ニコニコ動画にアップされていた！ これではテレビ放送を見て歌詞を真似たのでは間に合わない！」

「そうは言うが弁護士、その証拠は？ 動画サイトにアップされていたと主張される楽曲は削除され、サーバーログも残っていないこの事ではありませんでしたか？」

裁判官の言葉に肯定の意思を伝える健太郎。これまでも何度か

行われたやり取りであった為、誰もが「またコレか」と、肩透かしを食らった形で重たい息を吐く。

だが今回は健太郎の一言によって、これまでとは少し違う展開を見せる。

「ここで、お呼びしたい人が居ます。彼を、ここに！」

証人の入室を求める健太郎。

しばらく後、法廷の重い扉を開いて姿を現したのは、気の弱そうなスーツ姿の男性だ。青い顔で緊張に震え、とても現状打開の妙手となるような人物には見えない。

「自己紹介をお願いしますか？」

「はい……自分は、川瀬慎吾かわせ しんごと言います。島山昭助の……マネージャーをしています」

原告の味方であるはずのマネージャーが、どうして被告側の証人として出廷しているのか？

法廷がざわめき始める。

「川瀬さん、あなたは『ギフト』がネットにアップされた当日、楽曲データをダウンロードし、今も手元に持っていますね？」

「……はい」

もし本当に当日のデータが残っていたならば、それは『ギフト』が『歌声を愛にかえて』よりも先に発表されていたという証拠となり得る。

突然の事に、慌てて原告側弁護人が川瀬へと食ってかかる。

「ま、待った！ どうして島山のマネージャーであるあなたが、そ

の楽曲を持っている!? 納得の行く理由をお聞かせ願いたい!」
「ひいっ!?!」

原告側の剣幕に怯え、息を飲む川瀬。彼は健太郎にすぎるような目を向ける。

「……証言を、お願いできますか?」

健太郎に促され、川瀬は大きく頷く。そして昴の方へと向いて、はつきりとした声で言った。

「自分は昔から、そこに居る昴さんの……ファンだからです!」

川瀬の証言に、一番驚いたのは他でも無い昴だった。キョトンとした顔で証言席を見つめ、あんぐりと口を開く。

「『ギフト』からの、にわかファンではありません! 十年くらい前からネットで発表されていた曲全て、ダウンロードして持ってます! アレンジも、フルバージョンも全部!!」
「……と、いう事です。おわかり頂けましたか?」

『ギフト』だけならともかく、今や手に入り難い十年も前のデータを持ち、しかも昭助のマネージャーである川瀬の発言は、それなりの説得力でもって裁判官の胸を撃った。

しかし原告側弁護人も食い下がる。

「異議あり! 改竄が容易なデジタルデータであるなら、ファイルのタイムスタンプを変更する事も可能です! 彼の持つデータには証拠品としての……」

「言うと思ったぜ! これならどうだ!?!」

健太郎の合図で法廷の扉が開くと、その向こうには十人……いや、二十人以上の人が立っている。老若男女、背丈も格好も様々な人々。彼らの視線は一樣に、被告人席に立つ昴へと向けられていた。

「彼らは皆、この川瀬さんと同じくスバルの危機に駆けつけてくれたファンの皆さんだ！ ネットから消された『ギフト』を始め、みんなスバルの曲を消える前にダウンロードして個人で所有している！」

高らかに、歌い上げるように声を張り上げる健太郎。

「確かにニロニロ動画のサーバログは消えた。だが、彼ら個人が契約しているプロバイダのログは残っている！ここに居る二十四人分！そして今日は来ていないが、まだ百名近くからログ提出の許可を得ている！これは『ギフト』が『歌声を愛にかえて』に先んじていた証拠になる！！」

「い、異議あり！証人は……」

「まだあるっ！！」

原告側弁護人の声に被せ、健太郎が叫ぶ。

「裁判の前、被告人の部屋に空き巣が入った。それにより裁判の証拠となる物の大半が奪い去られてしまったのだが……先程、担当の刑事から連絡があった。被告人の部屋に入った空き巣が逮捕された、と！」

先程の電話はそれだった。この瞬間を健太郎は辛抱強く待っていたのだ。

顔色が変わった原告側弁護人へ、止めの一撃を叩き込む！

「そして逮捕された空き巣は、担当刑事に『島山に頼まれた』と話しているそうだ!!」

「~~~~~………ッ!!」

声が、止む。

途端、水を打ったように静まり返る法廷内。

申し訳程度に健太郎が「証拠の提出は本日の裁判に間に合わないが、次回で提出する」と付け加える声だけが、空虚な空間に響いた。事実上の決着は付いた。

裁判官が小槌を使う間も与えぬ、一気呵成の逆転劇。

「以上、被告弁護人からの………いや、スバルのファンたちからの援護射撃、終了だ」

弁護士、白地健太郎の長い戦いは、ここに勝利を持って終りを告げた。

第二十一話：残酷な天使のテーゼ

若手女性歌手 *m i m i y* は、冷たいマイクを手にステージの端でしゃがみ込み、自分の出番を今や遅しと待ち侘びていた。

デビューして三年、やっと掴んだ大舞台。『愛が宇宙を救う』テーマソングのメインボーカルとしてステージに登場する瞬間が、もう目の前に迫っている。

この座を掴むため、望まぬ頭を下げ、心無い笑顔を作り、身体を張って耐え難きに耐えた。番組イメージカラーである澄んだ青のステージ衣装は様々な柵に塗れ、薄汚く穢れている。だが、それでも……。

「*m i m i y*さん、スタンバイ！ 屋根、開きます！」

スタッフの張り詰めた声が、思考の海に潜っていた彼女を現実に引き戻す。

ステージを構成する大型トラックの荷台が、鳥の翼のように展開。仕切られていたステージ内と会場とが、一つに繋がる。

歩行者天国を埋め尽くす観客の声。眩しい外の光。夕方だというのに、無数のスポットライトが昼間を越える明るさでステージを照らしている。

「シヨースケさんのトークを合図に入って下さい！」

「わかった！」

頷く *m i m i y*。

目を向けた先、ステージへ立っているのは昭助だ。

「この歌のCDを皆さんに買ってもらって、そのお金で他人を助ける。

こんな素敵な事ないで？ 俺はそう思う！」

何を白々しい。自分たちだけは損しない値段設定にしておいて、良く言えたものだ。どうせこの『歌声を愛にかえて』もゴーストライターが書いた物だろう。何十曲も書かせておいて、昭助が選んだ。きっと、その程度の歌だ。

でも私はそれで構わない。島山昭助は自分にとっての発射台。この歌は飛び出すための翼。

このチャンス、何が何でもモノにしてやるんだ！

「そしたら、俺の歌を歌ってくれるmimiyに登場してもらいましょ！ どうぞお！」

「ハアイ！！ みんなあ、盛り上がってるう！？」

諸手を挙げて喜ぶ人々。肌を打つような歓声。世界中の全てが自分に注目している、そんな気にさせてくれる瞬間を味わいたくて、mimiyはステージへと登る。

昭助も、歌も、手段に過ぎない。この場所でのみ得られる、ただひと時の悦びの為に。

「今からmimiyが歌ってくれる歌、テーマは無償の愛や。歌う人の心を……」

ステージ上で続く昭助のトーク。重く真面目な語り口に、観客は口を閉ざして静かに聞き入る。

これが終わると同時に曲が流れ始め、昭助とmimiyがセンターを入れ替わる段取りだ。

「歌は誰でも歌える。でもな、ホンマ物の歌は違うんやって所を、このmimiyが俺に見せてくれよんねん！ ほんやから……！」

昭助の声に熱がこもる。彼の一人語りは最高潮に達し、これでもかと思われに愛を強調し、耳障りの良い言葉で自らの意見を飾り立てる。

「でも、そんやからこそ……?」

その時、音楽が流れ出した。昭助のトークが終わると同時に流れ始めるはずの『歌声を愛にかえて』が。

「なんやねん、エエとこやのに。スタッフ何しとんのや、早すぎやろ！ 使えん連中やなあ」

マイクに入らないよう毒づく昭助。一番の見せ場を台無しにされ、スタッフへ苛立ちの視線を送る。だが、スタッフはそれぞれどこでは無かった。

ステージに設置されたスピーカーからは、何の音も出ていないのだ。

「音源はマイク以外、全て沈黙してます！」

「じゃあこの音楽はどこから流れてるんだ!？」

慌てふためくスタッフを他所に、一人冷めた目で状況を観察していたm i m i yが会場の一角を指差した。

「……アレじゃない？」

観客を含めた全員の注目が、指差す方向へと集まる。そこにあるのは、小さなトラック。重量にして二トン程の、どこにでもある地味なトラックだ。

ステージの設営時からずっと停まっていたトラック。何の変哲も無かったその荷台から、いつの間にか何本ものケーブルが伸び出し、会場各所のスピーカーや電源に繋がっている。

「あ、アレやつ！ なにしとんや、早う……！」

昭助に言われるまでも無く、トラックへと駆け寄るスタッフ。イメージカラーである青いシャツがトラックの周囲に殺到した……その時だ！

バカンッ！ と爆発したかのような勢いで、トラックの荷台側面が開いた。

真っ白なドライアイスの煙が大量に噴出して、スタッフを押し戻し、周辺で大きな渦を巻く。

異常事態に気付き、何事かと騒ぎ始める観客たち。そのざわめきを掻き消すかのように、スピーカーから流れていた音楽が大きくなった。

その音楽は『歌声を愛にかえて』……いや、『ギフト』の前奏だ。そしてスピーカーを通し、会場全体に響く若い娘の声。

「私の歌を、取り返しに来ました！！」

声の主は、白煙の引いたトラックの荷台で真っ赤なドレスに身を包みんで立っていた。

第二十二話：作戦開始！

時間は、少しだけ遡る。

裁判所を終えた健太郎が勝ち鬨を上げ、昂がファンに囲まれてオドオドしていた時の事だ。

鈴音はコートを羽織り、トラックの荷台に居た。

ドライアイスが立ち込める中に、酸素マスクをして一人。かなりの寒さではあったが、そんな事は気にならない程に鈴音の魂は滾る。

『……裁判所より連絡。作戦成功。繰り返す、作戦成功！』

イヤホンからノイズ交じりの声が、嬉しい知らせを送り届けてくれた。父は弁護士として、昂の親友としての役割を果たしたのだ。

溢れそうになる喜びの涙を押し止め、手の中にある真新しい大学ノートをぎゅっと握る鈴音。

手遊び程度にパラリと開いたそのノートには、見覚えのあるしつかりとした文字と記号が、所狭しと書かれていた。

ノートの一ページ目には『ギフト』と書かれており、次のページからは全体にわたって音程を再調整し、更に未完成だった二番を組み込んだ完成版の『ギフト』が書かれている。

曲を奪われ、牢屋に放り込まれて、空き巣にまで入られた失意の中。立ち上がるのも辛いであろう状況で、昂が必死に作り上げたのだ。

そしてノートの最終ページ。真っ白な紙の端に書かれた一言。

『この曲を

君に贈る』

鈴音はノートを胸の中に抱きしめ、決意を新たにする。

心細くないかと問われたら、心細い。緊張は無いかと聞かれたら、激しく緊張している。だが同時に、必ずやり遂げるとも答えるだろう。

そして昭助の手から、『ギフト』を取り戻す！

『鈴音さん、番組プロデューサーからゴーサイン出しました！』

イヤホンからの声。同時にトラックの周りが慌しく動き出す。

次々に接続されるコード類。ディーゼルエンジンが低い唸りを上げ、機材の隅々へと電力を行き渡らせる。

鈴音もコートを脱ぎ捨て、準備に入る。下に着ているのは真紅のドレス。『愛が宇宙を救う』のイメージカラーである青に対抗しての色だ。

この衣装を見る度、鈴音は感謝の念に囚われる。

ドレスも、トラックも、各種機材も全てボランティアを自称する人々が用意してくれた。その実は、インターネットを通して昴と鈴音の窮地を聞きつけたファンや有志たちだ。

『皆さん聞こえますか？ 鈴音です。これより、歌を……私の歌を取り返しに行きます』

マイクのスイッチを切り替え、酸素マスク越しに協力してくれる者たちへメッセージを送る鈴音。お揃いの赤いシャツを身に付けた彼らは、奪われた歌を取り戻そうともかく鈴音へ、黙って手を差し伸べてくれた。何の見返りも求めず、ただ「自分がそうしたいから」と名乗り出てくれた。

『皆さんで悪人を、ぎゃふんっ！ と言わせてやりましょう！』

外の雑踏やディーゼルエンジンの音に紛れ、どこからか力強い賛

同の声が上がった。そしてトラックの荷台内部にも電気が通り、電飾が眩く輝き出す。

機は熟した。

鈴音は酸素マスクを外し、大声で叫ぶ。

「これより、おくりもの作戦を開始します！」

第二十三話：ギフト（full ver）

突然トラックの荷台に現れた赤いドレスの少女に、会場は混乱の増埒と化した。

あれは誰なのか？ 一体何が起こるのか？ 観客たちは口々に騒ぎ立て、混乱は収まる事を知らず広がって行く。

「早う取り押さえんかい！ 何をしとんのやオマエら！！」

最も先に事態を把握したのは昭助だった。このままではマズイ事になる。直感的にそう感じた彼は、指揮下のスタッフへ突撃指令を下す。

足止めを食らっていた青いシャツのスタッフたちも、昭助の怒鳴り声に反応して体勢を立て直し、鈴音のトラックへと再度迫る。だが赤いシャツを着た人々がスクラムを組み、真紅の防波堤となって青い波を押し返した。彼らはトラックの周りをぐるりと囲み、身体を張って外敵から歌姫を守る。

『鈴音さん、今です！』

イヤホンから聞こえる指示。

鈴音は緊張に震える脚をしっかりと踏ん張りなすと、混乱する人々の波を越えた先、眩いステージに立つ昭助とmimiyを真っ直ぐに指差し、高らかに言い放った。

「あなたがたの『歌声を愛にかえて』は、私の歌『ギフト』を奪い、改変した偽物です！」

突然現れた少女の言葉に、会場が大きくどよめく。

「それを今、ここで証明します!!」
「……チッ!」

小さく舌を打つ昭助。

まさか生放送中に仕掛けてくるなんて。取るに足りない小物に思いがけず足を引っ張られた気分だ。

偶然ネットで見かけた素人の曲など、奪い取った所で誰が文句を言う物かと思っただが、少々認識が甘かったようだ。

アホな観客どもは小娘の気迫に飲まれて判断力を失っている。今ここで有る事無い事ぶち上げられたら、火消しに時間がかかってしまう。なんとか口先で言いくるめない!

「ナニを言うてんのキミ? 偽物とか意味わからんわ。『歌声を愛にかえて』は、俺が作った俺の曲やって。もう何回もテレビで……」
「違います!!」

マイクを片手に軽快な調子で語りだした昭助の声を、鈴音の声が掻き消した。

「『ギフト』は、スバルさんが私の為に作ってくれた、私の歌ですっ!!」

小柄な少女が放った裂帛の気合。それが百戦錬磨を誇る昭助から言葉を失わせ、mimiyを数歩下がらせる。

それと時を同じくして、鈴音の足下から勢い良く吹き上がる純白の煙。そこを色とりどりの光が、リズムに合わせ軌跡を伴って鮮やかに舞い踊る。

「すはっ……!!」

鈴音が、大きく息を吸い込んだ。
前奏が終り、歌が始まる。

「――あともう少しで届いていた――」

会場全体に、澄み切った歌声が広がる。

広い会場に響き渡る程のボリュームだ。相当な大音量であるはずなのだが、真紅のドレスを身に纏う少女の声は清々しく力強く、心地良い音量で聞く者の中へと滑り込んでくる。

観客のざわめきが消えた。

誰もが……観客もスタッフも、昭助やmimiyですらも。鈴音が歌う完全版『ギフト』に耳を奪われ、言葉を失った。

決して速くは無いテンポ。だが空を舞う燕のような鋭さで、会場の澁んだ空気を切り裂き、モヤモヤとした気分を吹き飛ばしてくれる。

「……っ！ な、ナニをボンヤリとしとるんや！ mimiy、オマエも歌い返さんかい！」
「わ、わかりました」

ようやく我に帰るmimiy。そうだ、自分だって飛び立つ翼を失うわけにはいかない。

「ボリュームを最大まで上げて！ あの程度の声量なら、アタシの方がっ！」

指示を受け、地響きがするような振動と共に、青いスピーカーが雄叫びを上げた。

mimiyの歌声。それは鈴音とは違う力強さを持った、安定感

と重厚感に溢れる魅力的な響きでもって会場へと広がった。

『歌声を愛にかえて』は盗作であり、彼女自身もその事に薄々気付いてはいたが、m i m i y はプロの歌手であり、相当な実力者である事には変わりはない。

彼女の遠く響くような歌声に、鈴音に魅入られていた人々が次々に我へ帰り、m i m i y へと声援を送り出す。
そして――。

『それがアナタからの――』

「ギフト――」

「気持ち――」

一番が終わる。

観客を挟み、会場を二分して競い合う二人の歌姫。

歌声では僅かに鈴音が上回っていたが、それ以外のダンスパフォーマンス等においてはm i m i y が大きく上回る。

「はあっ、はあっ……」

間奏が流れる中、深く呼吸を繰り返して上がった息を整える鈴音。緊張と慣れない環境が、少女から急速に体力を奪って行く。

練習通り、普段の……いや、普段以上の実力が出せていると思う。だが『ギフト』が自分の歌だと証明するには、まだ足りない。もっと、もっと何かを……！

そんな鈴音の焦りを象徴するかのように、ハプニングは突然起きた。

「……っ!?!」

鈴音周辺にあったライトの幾つかが、パチンと小さな音を立てて

消えた。同時にスピーカーの半数も、ゴムが切れたような音を残して沈黙する。

この時、強い負荷を受けたケーブルの何本かが焼き切れるという事態が発生していたのだが、そんな事をステージ上の鈴音が知る由も無い。

薄暗くなった照明。ボリュームを減じたメロディー。対するmiyのステージは相変わらず、煌々と眩い輝きと共に力強い重低音を響かせている。

『鈴音さん！ 必ず復旧させますから、それまで粘って！ 歌うんです！』

イヤホンからの声に、ハツとする鈴音。既に、二番が始まっていた。

慌ててリズムを取り、音を合わせようとする。だが、うまく行かない。音程を合わせようとスピーカーの音に耳を澄ませる度、故障した機材からの雑音とmimiyの強烈な歌声が邪魔をする。

早く、早く歌い出さないと！ 焦りが、彼女から歌を奪う。

どうすれば……どうしたら？ 背中に嫌な汗が滲む。

次々に消えるライト。萎んで行くボリューム。あらゆる機材が不調を訴え、マイクさえも単なる鉄塊と化した。

真っ暗になったステージの上。何も出来ず立ち竦む鈴音。絶望が首をもたげ、取り返しかけた『ギフト』が、どんどん遠ざかって行く。

『あ……えっと、まあつまり……本当の意味で鈴音ちゃんの専用曲って事。鈴音ちゃんが良くわかんなくても、思い切り歌えば曲が合わせてくれるから』

暗闇の中、昴の声が聞こえた……気がした。

優しく、諭すような声色。聞くだけで安心できる、暖かな響き。昂は捨てなかった。多くの物を失い疲れ果てた時であっても、音楽だけは捨てたりしなかった。そんな彼から贈られた曲『ギフト』。思い切り歌えば、曲が合わせてくれる。

そう言った彼の言葉を信じ、深く深く息を吸い込む鈴音。そして……。

「――続く毎日が、どんなに陰しくぬかるんでも――」

響き渡る声。

これまでよりも大きく高く、心の隅にまで届く透明で力強い歌声。マイクも通さないアカペラであるにも関わらず、その歌はあらゆる障壁を貫いて人々の耳へ届いた。

昂に全てを預けた鈴音の、全精力を傾けた歌だ。

そして、その時を待っていたかのようにトレーラーに設置されていたスピーカーの何台かが復帰する。曲が流れ出し、更には照明が灯り、夕闇の中に真紅の少女を浮かびあがらせた。

「――側にいる。ただそれだけを誓って共に――」

心に響く歌声。

全力を振り絞る鈴音の為、スタッフもまた必死の努力を続けていた。

自らを壁としてトラックを守る者。油塗れで予備電源を稼働させる者。火傷を負いながらも焼き切れたコードを繋ぎ直す者。

これ以上、何者にも邪魔はさせない。歌声を止めさせやしない。そう心に誓って。

そして、そんな彼らの動きは次第に周囲へも影響を与えて行く。名も知らぬ誰かが、トラックを守る輪に加わった。無事なコードを持ってきてくれた。予備電源の移動を手伝ってくれた。その中に

は、青色シャツを着た者も居る。

誰かに言われたからではない。自分がそうしたいと思ったから、心のまま、正しいと思った事に力を尽くす。

「――それが私からの、ギフト――」

第二十四話：愛は勝つ

一度は暗闇に閉ざされた乱入者たちのステージが、再度輝きを取り戻した。

しかも信じられない事に真紅のドレスを着た少女はマイクを通す事無く、反対側で歌う自分の所にまで声を届かせている。鳴り響くスピーカーからのメロディーと、会場の雑踏とを突き抜けて！

二番を歌い終え、m i m i yは焦りと恐怖を感じていた。

歌はまだ、最後のサビ部分を残している。

マイクやスピーカーで増強された自分の歌声よりも、少女が歌う素の声が良く聞こえるなんて。このままじゃ自分は、あの娘に曲を奪い返される。翼を奪われる。せっかく飛び立てるチャンスを失ってしまう！

「もっとボリュームを上げて！ マイクもっ！！」

もう手加減はしない。

あの娘、確かに研ぎ澄まされた素晴らしい歌声の持ち主だ。生まれ持った才能を研鑽し続けて物にした、努力の結晶とも呼べる能力だろう。

だが緒戦はド素人。歌うと言ってもカラオケボックス程度で、ライブなど行った事すら無いであろう。そんな普通の娘に、あの声量を出し続ける事は不可能だ。

だが、自分なら。この『歌声を愛にかえて』を、最後まで全力で歌い切る事ができる。

まずは全てのボリュームを上げて娘の声にあわせ、音量を落せない状況に追い込む。そして彼女の声が掠れた瞬間、最大音量で歌を被せて何もかも潰してやろう。可憐な喉も、切なる想いも全て！

ほくそ笑む m i m i y。

そう、彼女は厳しい芸能界に生きるプロなのだ。生き残る為、手段を選ぶような愚を冒したりしない。

「――続く毎日に、傷つき倒れ、全て失っていても――」

歌が、最後のサビに突入した。相変わらず乱入者の小娘はマイクを使わず美しい声で歌っている。

最高に盛り上がるパートが続くこのサビは、聞かせ所であると同時に喉に大きな負担を掛ける。ペース配分も考えずに全力で飛ばす娘は、必ずここで声を枯らす。

ここは室内では無い。土煙とホコリが舞い散る屋外ライブ会場なのだ。少しでも喉に違和感を感じた、その瞬間から崩壊が始まる。

「――側にいる。ただそれだけを誓って共に――」

音量を鈴音に拮抗させながら、じっとタイミングを待つ m i m i y。

まだ娘の声は枯れない。それどころか、曲が盛り上がるに従い声の伸びが良くなり、深みが増しているようにも思える。

だがまだまだ曲は続く。最後の瞬間、喝采を浴びて微笑むのは私の役目だ！

「――何があっても離さないよと、握った手の温もりに――」

また娘は歌っている。しかし、少し苦しげに喘ぐ姿が散見されるようになってきた。

喉に感じる違和感。

あと三フレーズ、ニフレーズ、一フレーズ……ここだ！

「――……？　っ!？」

声が、掠れて消えた。正確には、もう少し前から殆ど歌声になどなって居なかった。

そして会場に響き渡る歌声——鈴音の歌声。

声を枯らし、喉を潰したのは、m i m i yの方だった。鈴音の音量に合わせて歌う内、無理をしまっていたのだ。

二人の歌姫、その才能に差は無かった。

結果を左右したのは、ただ一点。

『ギフト』が、鈴音の為に作られた、彼女専用の歌であったという事。

互角の才能と、鈴音の全力を無理なく引き出せる曲を前に、新進気鋭のプロ歌手は、力なく膝を折った。

「——それが私たちの、ギフト——」

その頃——。

遠く、ライブ会場から割れるような拍手と歓声が聞こえてくる。

会場からこっそりと抜け出した昭助は走るタクシーの中、会場へ向けて忌々しげに唾を吐き、窓を閉めた。

車載テレビは生中継で、赤いドレスの娘が紅潮した顔で声援に応え、恥かしげに手を振る姿を映している。チラリと映る反対側のステージでは、m i m i yが力ない表情で蹲り、スタッフの介抱を受けていた。

「使えんやっちゃんのう、あの糞ビッチも！ 素人に負けるヤツが居るかいな！」

あれだけ世話を焼いてやったのに、恩を仇で返しやがった。どこまでも無能な女……二度と仕事を回してなどやるものか。テレビもラジオも雑誌も、俺の息が掛かった媒体全てだ！ 俺の期待に背い

て、マトモに仕事を続けられると思ったら大間違いだと知るがいい。そして件の娘だ。俺に恥をかかせた赤いドレスの娘……あいつだけは許しておけない。

牢屋にブチこんで、泥棒に家財を奪わせる程度では済まさない。奈落の底に突き落とし、女として生まれた事を後悔させてや……？

「ん？ どうしたんや。まだ目的地と違うで」

タクシーが、ゆっくりと停まった。

良く見れば前方と左右、そして後方にも白いセダンがピッタリと張り付き、身動きの取れない状況となっている。

セダンの扉が開き、降りてくるスーツ姿の男性が数名。

彼らは昭助が座る座席の窓を、指先で軽く数回叩いて言った。

「島山昭助さんですね？ 警察です……ご同行を願えますか？」

第二十五話…希望の鐘が鳴る朝に

翌日――。

興奮冷めやらぬまま眠れぬ夜を凄し、疲れの残る体を引き摺って学校へ登校した鈴音を待っていたのは、学校中から浴びせられる無数の質問と、あらゆる方向から向けられる携帯カメラのレンズだった。

「昨日のテレビ！ あれって鈴音でしょ！？」

「どうしてあんな事してたんだよ！？」 『ギフト』 って何だ？」

「あの会場に私も居たんだよ！ 声掛けたのにい！」

教室に入るや否や、クラスメイトたちに囲まれる鈴音。

覚悟はしていた。

携帯に届いていた何十件もの着信と、百数通ものメールを見た時から。

「オレ、感動して泣いちゃったぜ！」

「ねえ鈴音、一緒に写真撮ってよ！」

「あんなハデな事をする必要あったの？」

全ての質問には答えられない。答えたいとは思うのだが、一つ質問に答える度に前の何倍にも及ぶ質問が帰ってくるのだ。正直……かなりウンザリする。

自分に苦情対応電話オペレーターは無理だと痛感する鈴音。

「ちょ、ちょっと待って。順番に話すからっ！」

友達へ、何度目かもわからない説明をしながら、事の経緯を思い

出す鈴音。

そもそもライブ会場に乗り込んで歌を取り返す発端となったのは、鈴音の一言だった。

『昭助に奪われた自分の歌を取り返したい。協力して欲しい』

鈴音はニロニロ動画に、そう呼びかけた動画をアップした。

すると、すぐさま数人から反応があった。「自分は画家だが、昭助に作品を奪われた」と語る者。「小説を盗作された」と語る者も居た。しばらくすると、彼らの知り合いからも反応が返ってくるようになった。そして知り合いから知り合いへ、どんどん広まって行く鈴音の救援要請。

やがて二日が過ぎた頃、協力者の数は百人を超えていた。

「それで、みんなで取り戻そうって事になって……」

集まった協力者の中には、昭助のマネージャーである川瀬慎吾が居た。

その事を最も喜んだのは父である健太郎だ。昴の裁判は証拠もなく、昭助を恐れて誰も証言台に立とうとしない。そんな中、川瀬は強力な証拠と証言が可能な唯一無二の人物だった。

ここに来て、裁判での勝利が見えた健太郎は言った。

盗作であるにも関わらず、昭助のブランド力やテレビの力で知名度の高い『歌声を愛にかえて』。そこから『ギフト』を完全に取り戻すには、世間の認知が必要だ、と。

そして生放送中のライブ会場に強襲をかける『おくりもの作戦』が考案されたのだ。

「手伝ってくれる人の中に、プロの音響屋さんとか洋服屋さんとかが居て、機材も衣装も全部手配してくれたの」

その間に健太郎は『愛が宇宙を救う』のプロデューサーと掛け合

い、生放送中の番組へ、サプライズの乱入の許可を取った。番組テーマソングが法廷にて闘争中である事を振りかざしての交渉ではあったが、思いの他あっけなく、プロデューサーは許可を出した。

芸能界において、あまりに強くなりすぎた島山昭助の権力を削ぎ落としたいとの思惑があったのかもしれない。

「それで、後はみんなが見た……」

「コレだろ？ 今、テレビでやってるぞ白地！」

友人の一人が携帯でワンセグ放送を受信し、頭上にかざしている。どうやら朝のワイドショーが放送中のようで、小さな画面の中で真っ赤なドレスに身を包んだ自分自身が、鬼気迫る表情で歌声を上げている。

「おおっ、ホントに白地がテレビ出てる！」

「このドレスも用意してくれたの？」

「鈴音、キレイだねえ……」

何がキレイなものか！

画面を見た鈴音は、火が出るほどに顔が熱くなり、この場から消え去りたくなった。

歌っている時は必死だったし、昨日もすぐ布団に入っただので、自分がテレビに出ている場面を見たのは今が初めてだ。

本格的なスモークや照明の中、強張った表情で棒立ちの自分。一応はダンスの練習もしたのだが、全く活かせていない。練習より上手く行ってるか思っていた昨日の自分を、助走を付けて蹴り飛ばしたい。

そして全力で歌うあまり、噴出した汗で化粧は流れ、ほぼスッピンになっている。しかも無意識の内にドレスの手袋で汗を拭って……！

「あ、あわわわ……み、見ないでえ……消してええええ……！」

両手で顔を覆い、机に突っ伏した鈴音。客観的に自分の姿を見る事が、こんなにも……死ぬほど恥ずかしいだなんて知らなかった。クラスメイトたちの笑顔が、ニヤニヤと自分を嘲笑っているかのように見える。

「謎の美少女ボーカル、真紅の歌姫に迫る！　だってよ、白地！」

突っ伏した顔の前に差し出された携帯画面に映っていたのは、汗まみれの真っ赤な顔で満足げな笑顔を浮かべる、美少女とは程遠い自分の顔だった。

最終話：Winners

電話のベルが鳴る。

「はい、こちら白地法律相談所です。法律についてのご相談ですか？ え？ ああ、取材のお申し込みですね？」

電話は三コール以内に出る。それが仕事における昴のルールだ。プライベートには適用されない。

彼は今、高級マンションの一室にある健太郎の事務所に身を寄せていた。

かつて務めていた会社は一応休職という事になっているものの、戻る気は無い。近日中に辞表を提出するつもりだ。

一ヶ月以上も休んでしまった事もあるし、芸能人との裁判や今回の騒動で世間に名前が知れてしまった。

間違った事をしたつもりは無いし今更後悔するような事も無いが、在籍を続ければきっと会社に迷惑がかかるだろう。その時『富永昴は退社しました』とスッパリ言えるよう、会社は辞めると決めた。

「……ふう。おい健太郎、また取材依頼だぞ。月末に予定入れたかな？」

昴と同じく一連の騒動で名が売れたのか、白地法律相談所の電話は朝から鳴りっぱなしだ。といっても大半は鈴音の事を聞かせて欲しい、という取材の電話なのだが。

それをわかっているのかいないのか、健太郎は落ち着いた様子でソファで寝そべり、朝からテレビに齧り付いている。

「ンな事より見ろよスバル！ また鈴音がテレビ出てるぜ！ がは

あッ……可愛い過ぎるだろ、俺の娘……っ！　どうして俺は会場に居なかったんだ……こんな馬鹿見捨てて、ライブに駆け付けられ良かった……！！」

本気で悔しそうに、薄っすら涙まで浮かべる健太郎に呆れながら、昂もテレビに映る鈴音の姿を見やる。

真っ赤なドレスに身を包み、真剣な表情で歌い続ける少女。ドレスの色が周囲のスモークに反射して、まるで彼女の周辺が燃えているかのようだ。

燃え盛る炎のような輝きを放ち、その歌声に熱い魂を込めて。人々の記憶に鮮烈な印象を残した歌姫は……。

「本当に、綺麗だ」

呟く昂。表情には、自然な微笑みが浮かぶ。

「なあおいスバルよう……」

その様子に気付いた健太郎が口を開こうとしたその時……。

ピンポーン。

玄関のチャイムが鳴った。

「ん？　客か……僕が出よう」

そそくさとインターホンへ向う昂。会話のタイミングを逃した健太郎は、まあいいか、と口を噤む。

ピンポーン、ピンポーン、ピポピポピンポーン。

鳴り止まぬチャイム。昂がインターホンに出る十数秒の間さえ待てないのか、激しく連打されている。

「そんなに連射しなくても、いま出るよ……はい、こちら白地法律相談……!?!」

「あああ! スバルさん助けてえ! 人が……人がいっぱいやああああ!!」

インターホンの画面に映ったのは、大勢の記者によって質問攻めに合い、もみくちゃにされる鈴音の姿だった。人が多すぎてマンシヨン入り口のセキュリティチェックが抜けられず、捕まってしまったのだ。

「あれ、鈴音ちゃん!? どうして裏口から入らないの? あそこだったら目立たずに……」

記者の待ち伏せが予想された今日。昴と健太郎は隣のビルと繋がる抜け道を使って行き来していた。当然、学校帰りの鈴音もそちらを使用するだろうと思っていた昴だったのだが……。

「ああ、俺が鈴音に言ったんだ。正面から戻って平気だって。一人や二人は取材居るかもしれねえけど、ダッシュで振り切れるって」

平然と言い放つ健太郎。その間にも彼の可愛い娘は、何十本ものマイクを向けられてどうして良いかわからず、半泣きでオドオドしている。

「アイツ、何もかも上手く行って調子に乗ってたからな。ま、怪我させられるような事も無いだろうし……良い葉だろ?」

「お前、何気に厳しいオヤジだよな……」

賤けの一環と言われてしまえば、そういう物なのかもしれない。だが、ちよつと可哀想だ。

「トラウマになる前に、助けてくるよ」

ドアを開け、駆け出す昴。

しばらくしてインターホンの画面に、記者の群れから助け出された鈴音が、昴の胸に顔を埋める姿が映し出された。

それを見て微妙な笑顔を浮かべた健太郎は、パソコンを起動させ、ブラウザからニコニコ動画のトップページを呼び出す。

「さて、スバルが居ないうちに……と」

健太郎が表示させたのは、僅か三分ほどの動画。それは鈴音が、自分の曲を取り戻したいと願い、力を貸して欲しいと協力者を募った動画だ。

再生ボタンを押す健太郎。すると画面の中の鈴音が、真剣な表情で話し始める。

「皆さん聞いて下さい。いま私に歌を……『ギフト』を作ってくれた人が警察に捕まっています。そして『ギフト』も他人に取られてしまいました」

「たかが歌と思うかもしれませんが、でも、私にはとても大切な歌なんです」

「大事な人が、私の為に苦勞して作ってくれた歌なんです。だから、どうしても取り返したい」

「お願いです、私に力を貸して下さい。歌を取り戻す為に！」

「あの歌は、『ギフト』は……私の、私の大好きな人がくれた歌なんです!!」

停止ボタンを押し、またも微妙な表情で微笑む健太郎。

「スバルにや、絶対に聞かせてやらねえ」

イジワルそうな口調で言って、健太郎は削除ボタンを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2776v/>

おくりもの

2011年7月29日09時51分発行